

幻想郷で俺は変わる！
(はず)

@璃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、一人の人間が幻想入りした。

その人間について、スキマ妖怪は、『知らない』と答えた。

前世の記憶の無い（気にしてない）人間の小さな変化と心が変換される物語。

「ねえ？ 楓？ 貴方は幻想郷に…」

いや私にとって必要だから… 心配しないで。」

新しくハーメルンの方で執筆を始めた璃と申します。

よろしくおねがいします！

初めての執筆ということで少し緊張しておりますが、
温かく見守っていただけると幸いです

あと感想もお願います。アドバイスとかあったらうれしい。

※変わる要素皆無

改正 6 / 29 あらすじ変更

5 / 04 章管理変更

目次

設定資料集

資料① 既出スペルカード一覧

1

資料② 本作におけるキャラ設定

12

第1章 幻想

幻想入り 再投稿

25

楓の能力

32

そば！そば！（サブタイトルのセンス

：

37

紅魔館の魔法少女 再投稿

44

紅魔館のお嬢様

49

てみだ！毘だ！もこたんだ！

55

V S 魔理沙

60

妖怪の山編

I

64

妖怪の山編

II

69

妖怪の山編

III

76

妖怪の山編

IV

83

妖怪の山編

V

89

魔法修練

96

第2章 湧き出る地霊とムシフェッショ

ナル

上海人形

105

すーぱーみすちーうなぎやたい

112

わかさぎのしおや：―― 120

幻想郷にU F Oがやってきた？

126

核そして空々業火マントル (地霊殿

編 I)

131

潤悪な無間嫉妬々緑眼のジエラシー

(地霊殿編 II)

137

剛欲と鬼々旧地獄街道を行く (地霊

殿編 III)

142

釣瓶落し・感染蜘蛛絲々暗闇の風穴

(地霊殿編 IV)

153

地霊殿と死体猫々死体旅行 (地霊殿

編 V)

158

さいこめとりー 少女さとり (地

霊殿編 VI)

164

こめいじーさとり 3 e y e . (地

霊殿編 VII)

172

閉じた瞳・開いた心々ハルトマンの妖

怪少女 (地霊殿編 VIII)

178

リグル大陸・ムシフエツシヨナル仕

事の流儀

185

花より団子。

190

チルノを改造した話。

197

妖精大戦争編 I 『大戦争 小異変』

・ 『光の屈折』

205

妖精大戦争編 II 『宣戦布告』

毒々しいね

301

木に電飾を 【紅魔館のクリスマス編】

306

第4章 月の侵略と唐傘の刀剣

餅をつこう。

313

紺珠

318

おい誰が誘惑うさぎだ。

324

夢の国にようこそ。

329

冷凍月都・フランのおやつたいむ

334

天照大御神の光

341

設定資料集

資料① 既出スペルカード一覧

既出スペルカード一覧

『武符』『アルレベントクラッシュ』

楓のスペルカード

物体にかかる力を打撃力等に変換し物体を対象に触れることで発動するスペルカード。
殺傷能力は低い。

『変換』へんかん『重力重化』じゅうりよくじゅうか

楓のスペルカード

力を変換する程度の能力を利用したスペルカード。

対象（有機無機に関わらず物体）にかかる重力の量を増加する攻撃。明らかに原作ゲームでは意味のないやつですね。難易度NormalかEasyあたりじゃないで

すかね？

『へんかん
変換』『じゅうりよくむげん
重力夢幻』』

楓のスペルカード

力を変換する程度の能力を利用したスペルカード。

重力が対象（有機無機に関わらず物体）にかかる方向を変更する攻撃。（守備にも応用可能）

これを使えば手を使わずものを動かせる。（かなりの練習が必要Ⅱそんなにいらな
い）

追記

夢幻と言うが、これは楓以外に誰にも発音できないそう。

『武符』『アルレベントフレア』』

楓のスペルカード。

アルレベントクラッシュの派生スペルカード

炎を物体（今回はレーヴァテイン）にまとわせ攻撃する。

5段階の攻撃を持つ。

Phase 1, 『斬撃』 Phase 2, 『魔撃』

Phase 3, 『砲撃』 Phase 4, 『反撃』

Phase 5, 『悲劇』

段階を発動者の自由な意志で進めれる。

ただし戻すには、スペルカードの再発動が求められる。

段階ごとの攻撃を具体的に表すと。

『斬撃』 スペル対象の物体を剣のように炎を、纏わせ斬る。

『魔撃』 多種多様な攻撃を持つ。

紅魔館編では炎の柱を使った。

『砲撃』 物体を大砲型（しいていうならお空の第三の足ののような感じ）に炎を纏わせエネルギーを打ち込む。変換の能力を上乗せすれば、周囲の力を変換しより高威力になる。

『反撃』 相手が自分にダメージを負わせることが発動条件。

相手が一撃必殺型の場合ものすごく相性が悪い。

ただし持ちこたえれば一気に形勢を逆転できる。

攻撃方法は相手の攻撃に依存する。

『悲劇』 最後にして最強。

発動時は事実上無敵。

攻撃方法を自由に変えられる為、相手の弱点を衝ける。

追記

各 phase には最もプレーンなオリジナルの攻撃方法と Side と呼ばれる別 Ver が存在する。

ただし反撃と悲劇には存在しない。

オリジナルはその武器等に対する知識や熟練度がなくとも使用できるが、Side は熟練していないとうまく扱えない。

だが楓の『あらゆる武器を扱う程度の能力』により、熟練度は関係なくなる。

ただし、このスペカを上記能力無しで使用する場合それぞれの Side の熟練度をあげないといけない。

『斬撃』

Side A 『連斬』攻撃の質を変えずに、そのまま連続攻撃ができる。(ある程度の剣術を必要とする。)

Side B 『剣聖』片刃の剣(日本刀)と形で攻撃する。(刀系統の剣術を必要とする。)

『魔撃』

Side A 『フェニックスブレイズ』より純度の高い炎を扱う。(一定以上の魔力が必要)

Side B 『ドラゴンセーブ』魔力が集まり龍を象る。(一定以上の魔力が必要)

Side C 『ウォールブラスト』魔力を集中させ壁を作り攻撃から身を守る。

『砲撃』

Side A 『ショット』ショットガンを象る。オリジナルと同威力で二連射できる。一度に2丁まで出せる。

Side B 『ガトリング』大量の小型弾幕を飛ばす。射撃時間が長い。

Side C 『スナイプ』完全な狙撃型。近接戦には使えない。

Side D 『レーザー』オリジナルより高火力の攻撃。命中精度は腕前による。(すべてそうやが)直線的な射撃しかできない。

模技『夢想封印』

楓のスペルカード。

博麗霊夢のスペルカードを模倣したもの。

霊。すなわち霊力を操り御札の形にし相手に放つ。

霊力でできているため、物理攻撃での破壊ができない。

ただしもとななる御札が破壊された場合、即座にその他の札は消える。視覚が優先されて消されるため、消えたように見えても、一秒ほど効果をもつ。

追記

霊夢本人いわく「私のより威力もないスピードも全然だけど、破壊できないのがねえいざ相手にしてみると、ものすごい鬱陶しいのよね。」とのこと

『模技『マスタースパークのような閃光』』

魔理沙のマスタースパークを模倣したもの。

（模技『夢想封印』）とは違う性質を持つ空中に巻き上げた対象を閃光させビームのようにしたハリボテである。

物体には周辺にかかっている力を攻撃力等に変換し殺傷ができるようになっていいる。あくまでハリボテということがあり、本来のマスパとは違い曲げることができる。

追記

魔理沙いわく「曲がるだなんて聞いてないぜ。でもハリボテなんだろう？ やっぱり魔法は本物じゃないと美しくないからな。」とのこと。

『武符『アルレベントレーザー』』

楓のスペルカード。

アルベントフレアやアルベントクラッシュの類似スペカ。

魔理沙のマスタースパークや模技マスタースパークをもとに作られた。

その火力は魔理沙に劣らない。

『恐怖『無双不敵』』

楓のスペルカード。

守護防衛専門のスペルカード。

使用後5秒間すべてのダメージを消し去る。

弾幕、物理、魔法、毒、呪い、あらゆる攻撃、状態異常が対象。

一瞬の攻撃には、敵はいない。

これは弾幕ごっこの規定上、制限したものであり、本来は、意識集中又は霊力の限界まで無敵状態になる。

正しくチートな、スペルである。

『恋煩『マスタースパーク』』

魔理沙のマスパをもとに作られたスペカ。

模技マスパとは違い、正真正銘の本物。パチュリーによる魔法修練によって作られた。

パチュリーが教えているためどこかの火力バカとは違い、繊細な、魔力の動きをする。本家よりスピードも威力も落ちるが、何故か避けにくい。(能力で火力上げたら正しく最強。)

『模技『マスタースパーク 突』』

針や槍をもととした模技マスパ。

本家マスパより殺傷能力が高い。

そりや武器付いてるしね。

『模技『夢想封印 防』』

楓のスペルカード。

模技『夢想封印』の派生。

形成した霊(力)札を一箇所に集めて、防御させる防御スペカ。

本体の御札が破壊されるまで、霊(力)札は攻撃を受け付けけないという特性を活かしたものの。

解除方法は、スペカを終了させるか、防護壁の中にある霊(力)札を破壊すること。又は霊力をその他のものに変換する。(紫など一部のもは、能力により、意味を失くす。)

『霊魂』『転生天羅』

楓のスペルカード。

霊を操る程度の能力を使ったスペル。

怨霊を集めて相手に遅いかける。

怨霊は精神ところを蝕む。

そして精神ところの最深部に入りこむと輪廻転生から外される。

恐ろしいスペルだ。

ただしこれは罪の重い人程かかりにくくなる。

ちなみにお隣の場合は、地獄で懲役数百年ほどで済んでいる。

『霊符』『手形』

楓の使うなんか。

スペカとは別扱い。

霊の能力や権限なんかを『手形』という形で行使できるようにしたもの。

手形には視覚発動魔法がかけられており見るだけで使用できる。

楓は封筒に入れて持参している。

ただし一度使えばもう一度魔法をかけ直す必要がある。

これを使って霊のスペルカードを使う場合スペルカードとして扱われる。

『武器『偽慥剣』』

楓のスペルカード。

霊力を集めて剣の形にし攻撃する。

霊力でできているため、壊れない。

まあ楓が持つてるんだからなんだろうが簡単には壊れんが。(技術だよ技術。)

これを使用すれば対象なしでアルレVENTフレアなどが放てる。

『武器『無慈悲なお祓い棒』』

楓のスペルカード

霊夢のスペカを真似したもの。

本家よりだいたい性能が劣るが技をかき消すには丁度いい

『桜符『煉丹されし幽霊花』』

幽々子の弾幕からインスピレーションを受け作った楓のスペル。

自分を中心に花を咲かせ弾幕を展開する。

胡蝶の弾幕がいくつか飛び立ち蝶がなにかに触れると蝶が一気に増え相手を攻撃する時間差スペカ。

最初の弾幕は大して密度も速さもないので油断させてバーン！的な攻撃。

反射『石凝姥命の鏡』

薄い防御膜を張って相手の攻撃を跳ね返す

ただし一撃必殺に弱く反射しきれない場合がある。

反射した分だけ霊力がばか減りする（楓には関係ないさ）

資料② 本作におけるキャラ設定

一部ネタバレがある可能性があります。

最新話まで読んでも、ネタバレ要素がある可能性があります。（というか執筆時点でもうあります。）

キャラクター設定

徒花 楓 —あだばな かえで—

本作の主人公

オリキャラ

外来人。

性格は適当。一人称は「俺」外の世界で何らかのトラブルがあつた模様。
能力

『力を変換する程度の能力』

楓の能力

あらゆる力と力を変換する。

人にはそれぞれの能力値がある

得意なもの苦手なもの

強いもの弱いもの

あらゆる割り振りがある。

この能力はその力の割り振りを変えることができる。

発動条件は決まった定型文に特定の力を当てはめた文を「言う」「書く」を実行した際。

追記

おそらく楓が最も重宝している能力。

戦闘から日常生活においてまであらゆる場所に使える。

『霊を操る程度の能力』

楓の能力

霊の類いを操れる

例えば靈魂があるとして使用者はその靈魂を自由に動かすことができる。操った靈魂が意思を持つものならその意思を読み取れる。

悪霊は会話で意思を伝えることを欲しているがこの能力で会話を命令すれば能力展

開時の間言葉を発することができるようになる。

この能力を自分に行使すれば、自分の靈魂を操り、幽体離脱をすることができる。幽体の場合視覚、聴覚、嗅覚のみが働くこの状態で、魂のこもっていない肉体に入ることのできる肉体を使用し活動することができる。これを憑依と呼ぶ。

憑依をしている間は、この能力のみが受け継がれその他2つの能力は使用できない。ただし憑依した肉体が能力を持っていればその能力が使用できる。

他人の魂を、動かしたり上位の靈（亡霊等）を操る場合疲労の蓄積が極端に進む。発動条件は能力使用を思考内、または発言、及び文字に起こすことで発動される。

追記

地上ではあまり使われない感じ。

そもそも霊がないからな。彼岸、冥界、旧地獄などでは重宝される。

『ありとあらゆる武器を扱う程度の能力』

剣、斧、銃、刀、鈍器、弓、槍、数多の武器を意識せずに使用できる能力。

これを使えば木の棒でも真剣に勝てる。

使用できる武器は一日3種まで。

翌日の日の出にリセットされる

追記

普通に使える。

この能力の特有のスペカがないのはなんか寂しい。(作りようがないが。)

博麗霊夢 —はくれい れいむ—

本作における重要キャラの一人。

博麗の巫女。

主に異変解決を行うが、楓の武力向上のため(楓が強くなれば、めんどくさいことやつてくれるかもと思い) 異変での攻撃は控えめ。

能力

『空を飛ぶ程度の能力』

言うまでもないが、空を飛べる！

そこには広い意味があり、あらゆるものから浮けるといいう意味合いになる。

ふつーにつええ

霧雨魔理沙 —きりさめ まりさ—

普通の魔法使い。

異変解決を行う。

料理が下手という設定があるが、本編で出るかどうかは不明。

盗癖があり、よく同じ魔法使いであるアリスやパチュリーの魔導書や魔法の材料等を盗む。

しよつちゆう楓のスペカの実験台にされる。

なお本人はノリ気。

チルノがよく懐いていたとか。（楓に懐いてから、全く構われなくなった。）
なお本人は莫迦が近づいて来なくて嬉しいそうです。

能力

『魔法を使う程度の能力』

魔法を使う。以上。

本人いわく『弾幕はパワーだよ。』だそう。

レミアア・スカーレット

紅魔館の主。

吸血鬼でありながら、楓とは幻想郷屈指の仲。

（おそらくちび共を除けば、彼女の右に出るものは、霊夢（仲良しではないが）、輝夜や

妹紅、ぐらいであろう。）

本人曰く楓が、幻想入りしたのも『運命』だという。

自分は関係ない。らしい。

楓からは血の提供をしてもらっている。

能力

『運命を操る程度の能力』

文字通り運命を操る。

この世に起こるすべてのことは、『運命』であり、そのすべてを知るのも、変えてしま
うのも、この紅魔の吸血鬼だと。

本人は語る。

その他に吸血鬼としての能力も持つ。

フランドール・スカーレット

悪魔の妹。

495年間の間紅魔館の地下牢に幽閉されていた。

紅霧異変を機にその檻から出た。

吸血鬼。姉にレミリア・スカーレットをもつ。

紅霧異変時楓に敗北。その後彼女は楓を慕い、お兄様と呼ぶようになった。

能力

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』

万物には最も緊張している場所『目』がある。

彼女の能力はその目を自らの手の内に移動させること。

それを握れば、どんなに軽い力でも、すぐに対象は壊れてしまう。

楓との接触後、希少な常態化にある楓の血を取り込むことで吸血鬼でありながら、この能力の制御と日光や流水への耐性を手に入れた。

射命丸文ーしゃめいまるあやー

天狗の新聞記者

烏天狗であり山の実質の総大将である大天狗の支配下に置かれる。

霊夢とは昔から交流が深く（人間にとっての昔）

霊夢の味方をするこも。

ただし霊夢にはウザがられる。

能力

『風を操る程度の能力』

その名の通り風を操りいろいろなことができる。

脅しの1つに家を吹き飛ばすぞ。というのがある。

実際にやられそうで本気で怖い。

天狗としての天下一の速さも誇る。白狼天狗とは訳が違う！（何だどく！b y. 権）

東風谷早苗ーこちやさなえー

守矢神社の巫女。

霊夢とはライバル（自称）らしい。

外の世界出身で楓とも話が合う。

「タピオカってあの白いやつですよね！ぶにぶにの！」

「え？タピオカって黒じゃないですか？」

「そうなの？」

「はい」

「え？普通白じゃない？」

「え？そうですかね？」

といった会話があったそう（外の世界の知識は若干前）

能力

『奇跡を起こす程度の能力』

正直良くわからん能力。

霊夢さんによると「本当に奇跡なんて起こせるの？せいぜい今日一日転ばないとかでしよ？」ほんとにそうである。

魔理沙さんによると「どこぞの妖怪鬼と何が違うんだ？」とのこと。あまり変わりません。

八坂神奈子ーやさかかなこー

守矢神社に居座る一柱。

守矢神社の営業担当。

それっばいしめ縄をつけてる。
能力

『乾を創造する程度の能力。』

霊（乾ってなんだよ。

魔（なんなんだぜ？

楓（知るか。

早（私も知らないですね？

諏（そういや私も

とのこと。謎に包まれている。

洩矢諏訪子ーもりやすわこー

守矢神社の一柱。

守矢神社のごろ寝担当。

かえるっぽい帽子。

カワイイ！

能力

『坤を創造する程度の能力』

霊（これもわかんないわね。

魔（そうだな。

楓（まずこの漢字なんて読むんだよ。

早（はて？

文（洩矢諏訪子の能力の謎！特ダネいただき！

諏（まあ土とかのを操れるぞ

主（ようわからん。

八意永琳ーやごころ あqswでfrgthyじゆきおpー

永遠亭の主治医。

月から降りてきたらしい。

赤青。

見た目こそ若いが年齢は億単位らしい（うるさいわい）
能力

『薬を作る程度の能力』

そのまんまあらゆる薬を作ることのできる能力。

言うことはありません。

蓬莱山輝夜ーほうらいさんかぐやー

永遠亭のマスコット（無職）

マスコット…？

楓とはレミア並の親交がある。

うどんげとは仲がいいがてみるには楓同様畏に引つかかる。（永琳のにも）

能力

『永遠と須臾を操る程度の能力』

ようわからん能力です。

永遠は、変化のない時間

須臾は、感じることにすらもできぬほど短い時間といった感じでしょうか？

ルーミア

いわゆる寺子屋組に入れられているルーミアだが、

実は幻想郷屈指の実力者。

先代巫女をも上回るとされる。

今は御札により弱体化されているため巫女に倒されることが多く、里の人間からはさ

ほど強くないように思われている。

でも本気出せば人里は簡単に落とせる程には強いよ？

『闇を操る程度の能力』

闇を操る。

暗いところでもよく見える！

周りを暗くできる！

でもルーミア自身は周りには見えない！

チルノ

妖精の中では頭はいい方

決して天才ではないけどな。

楓になぜか敬語で話す

『冷気を操る程度の能力』

冷気だけでなく、氷なんかも操れる。

風見幽香

太陽の畑に住んでいる妖怪

その圧倒的な力は幻想郷でも最強格と恐れられる。

楓に野菜を売ってくれる（良心的価格）など結構優しかったりする。

『花を操る程度の能力』

花を操る 以上

第1章 幻想

幻想入り 再投稿

意識が朦朧とする。

死を自覚したのは、無意識下で復活を遂げたあとだった。

「貴方だあれ？」

誰かの声。

まだ幼い少女の声。

かつ獰猛な捕食者の声。

目を開けると、目の前に顔。

金髪に黒いジャケツト。

「あなたは食べてもいい人間？」

一瞬言葉の意味がわからなかったが、理解しどうでも良くなる。

「いいさ。ほら お食べ」

彼は今、彼の世界に飽き飽きしていた。

「そーなのカー」

少女が嘯みつこうと飛びかかる

「ちよつと待った!」

「!?!」

いきなり現れたのは黄髪の少女。

いかにも魔女っぽい服を着ている。

「ルーミア!この魔理沙様が退治させてもらうぜ!」

「そーなのかあー!」

バシツ デウツシ!

黄髪の女がいきなり少女を箒でぶん殴る。

「痛いのだー」

思わず黄髪に喋る

「かわいそうだろ」

少女に重なる昔の自分。

「何言つてんだお前は今こいつに食べられるところだったんだぞ?」

「でも…」

この瞬間をいいことに少女—ルーミアは逃げていく。

「お前さては外来人だな？」

「外来人？」

聞いたことのない名前だ。

「とりあえずついてくればわかるぜ」

「わかった。ついてく」

※

連れてこられたのは寂れた神社。

「ここは博麗神社だぜ。外来人はみんなここに送られるんだ」

「れーいむうー！おーい 起きてるかあ！」

黄髪が誰かを呼ぶ

ガタ！

神社の右手の母屋から物音が聞こえる。

「何よ。起きてるけど。」

黒髪ボツサボサで巫女服を着た黄髪と同じぐらいの女が出てきた。

「ほんとにー？ ほんとは今起きたんだろ あたしに嘘は効かないぜ？」

黄髪が煽る

「で誰あんた？」

黒髪が聞く

「こいつは、えーと誰だっけ？」

「…俺は徒花楓。」

黒髪がものすごくいや嫌そうな目をする

「ああ外来人ね 私は博麗霊夢よろしく…」

何だこいつ無愛想だな

「あたしは霧雨魔理沙だけ。魔理沙って読んでくれ！」

黄髪の少女は名乗った。

「じゃあ早速ここについての説明をするわね。」

「お願いします。」

「敬語はいいわ、呼び捨てでいい。なんか嫌」

「あたしも呼び捨てでいいぜ！」

霊夢がなにもない場所にむかって話しかける。

「紫見てるんでしょ？説明して。」

そう言うところが空間が裂けはじめ中から女性が出てきた。

「私関係ないんだけど。」

霊夢が、『紫』と呼ぶ女は答えた。

「じゃああなた以外に誰がいるのよ？」

「外来人さん？ 私は八雲紫 紫でいいわ。あなたは徒花楓さんね？」

「なんで名前知ってるんだ？」

「あつ、はい」

「そのことなんだが楓がいたのは無縁塚の近く。死人が迷い込んでもおかしくはないだろ。」

魔理沙が意見を出す。

「とりあえず上がってここについて説明をするわ」

「わかった。」

母屋とおもわれる建物に続々入っていく。

「お邪魔します」

「お邪魔するのぜ！」

「お邪魔します」

「なんであんなたちも入ってくるのよ。」

霊夢が突っ込む。

※

こじんまりした部屋にちゃぶ台が一つ

俺が障子側で

向かいに霊夢

俺から見て左に紫、右に魔理沙が座っている。

霊夢たちの話によると、

ここは幻想郷

俺が居た世界と結界で隔たれた場所。

そしてそれを管理する博麗の巫女それが霊夢だ。

魔理沙は魔法使いで

紫は妖怪だという。

信じがたいが魔理沙が見せてくれた魔法は夢ではなかったし、紫がなにもないところから出てきたのも妖怪だといえれば筋が通る。

「霊夢、この子の能力を見てあげたら？」

紫が提案する。

「わかったわちよつとまってる」

……

霊夢が部屋に戻ってくる。

霊夢は俺に鏡のようなものを渡してきた。

「これね、ちゃんとした名前はわかんないけど私は「博麗の鏡」って読んでる。これで能力や持っている霊力や魔力の量がわかるの。」

「へえー」

楓の能力

「あなたの能力は…」

ここは幻想郷

忘れられたものの楽園

その端に位置する博麗神社。

部屋にいるのは俺と霊夢、魔理沙、紫。

今は霊夢が俺の能力を調べてくれている。

「えーといくつかあるわね。」

・力を変換する程度の能力

・霊を操る程度の能力

・ありとあらゆる武器を扱う程度の能力

の3つね」

ふむふむ

「で、あなたは霊力を多く持っているわ。修業を積みめば私ともやり合えるぐらいには。」

ほうほう

「でさ、能力ってどう使うんだ？」

「うーん私の経験上『ありとあらゆる武器を扱う程度の能力』は武器を扱うのがうまいとかそのぐらいだと思う。確かめてみたほうが早いと思うけどね。」

「じゃあ霊夢相手してくれよ」

「やめといたほうがいいわよ」

紫が言う

「霊夢はチートすぎるからな。」

魔理沙も続ける。

「なら魔理沙とやるといいわ」

「ええなんであたしなんだぜ!？」

「わかった。せっかくだし霊夢？なにか武器になるものある？」

霊夢は台所に小走りで戻っていった。

「これでいい？」

「ありがと」

包丁だ

「それじゃ始めるぜ！」

魔理沙が手を横に広げると魔理沙に箒が飛んでくる。

それをがっちりつかむと飛び乗って箒に立ちながら
すごいスピードで飛んでくる。

「うわっ！」

腕が勝手に動いて箒の先をかすめる。

「恋符！ 『マスタースパーク』!!!」

弾幕ごっこ 幻想郷における決闘方法の1つ

互いの弾幕の美しさを競う。

魔理沙が使ったスペルカード「マスタースパーク」

虹色の光線が、俺に向けて飛んでくる。

「変換『靈力を防御力に変換』！」

俺の前に薄い膜ができてマスタースパークを防ぐ

「おいおい命中したはずだぜ！」

「よしこれなら！」

「靈力を脚力に変換！」

途端に足が早くなり魔理沙の飛行を追尾する。

「これならどうだ！ 『ファイナルスパーク』!!!」

さっきの膜が再び現れ、攻撃を軽減する。

プシャー

体の一部が切れ血が後ろに飛ぶ

「防御力が足りなかったか…」

「霊力を攻撃力に変換！」

包丁を華麗に振り回し魔理沙に向かって投げる

魔理沙は射程内からサラリと避ける

「こんな攻撃当たらないのぜー！」

その瞬間野球球の変化球のようにナイフが曲がり魔理沙の首すれすれを通る。

「うわあなんなのぜえー！」

そう言つて魔理沙はバランスを崩し箒から落ちる。

「負けちゃったのぜ」

「楓…なかなかやるわね…」

霊夢が口を開けて驚く

「そう？ありがと」

「戦つてたらお腹すいたでしょう？人里に案内するわ。」

「一緒にお蕎麦でも食べましょ。」

「やったのぜ！」

「何だあんたも食べる気満々なのよ。」

「何だあく霊夢のけちんぼ！」

「うるさい！」

そば!そば! (サブタイトルのセンス…

「あたいつたら最強ね!」

「チルノちゃん待ってよ〜!」

「ごめんごめん大ちゃん!」

「ここが人里よ。」

「幻想郷の殆どの人間がここにいるの」

霊夢のいうとおり人が多く、里は活気に溢れている。

「それよりさ!早くそば食べようぜ!」

「魔理沙:あんたなんできてんのよ。」

「一緒に食うだけだぜ。ちゃんと自分で払うって」

「それならいいけど…」

蕎麦屋 ばそ〜

何だこの変な名前の蕎麦屋は…

「さあ入りましょ」

「おじさん、かけそば2つ。」

注文

「あいよう。巫女さんよ彼氏さんかい？」

「違うわよ！外の世界から迷い込んできたから世話してるだけよ！」

「そうかいそうかい」

「大将！あたしはざる一つ！」

「あいよ」

……

「「いただきます」」

？少女食事中？

「なあ霊夢……まだ昼間なのにあそこの空だけ異様に赤くないか……？」

「まさか……異変……」

「私ちよつと行つてくる。」

「俺も行く……なにかやばいことが起きてるんだろ？」

「なら早く支度して。」

霊夢は地面を一回踏んで空に飛び立った。

凄まじいスピードで紅い空に向かって飛んでいく。

「したくさせろよ!」

「靈力を脚力に変換!」

※

しばらく走っていると靈夢に合流した。

そこには大きな館がありこれまた大きな門の前で誰かが寝ている…

「またあいつらか…」

「どうかしたのか?」

「前にね吸血鬼がいきなり現れてくる異変があつたの。

その時に出てきたのがこの主よ。」

「そいつが紅い霧を出した犯人ってこと。」

ほうほう

とりあえずこの主をぶつつぶせばいいということらしい

「あら…あなたは!博麗の巫女ですね!館には入れません!」

門番がきつぱり言う。門番の鏡だ。

「私の邪魔をするのなら、力でねじ伏せるまで!」

「靈符『夢想封印』!」

たくさんのお札が靈夢から放たれ、門番らしきやつに向かって降り注ぐ

「うぎやああああ」

「通らせてもらおうわよ」

壊れた門を進み館の中に入る。

「私は一階を探すから楓は地下をお願いします。」

「わかった」

俺は地下への階段を降り戸を開けた。

「ここは通さないわよ」

やせ細った、女…手には本。

「倒すしかないか」

「木火符『フォレストブレイズ』！」

「霊力を回避力に変換！」

飛んでくる弾幕を回避しながら、相手に近づく。

魔法か…

「ツ!!」

「日符『ロイヤルフレア』」

クソ！かすった…

図書館…1対1…スペカとやら試してみるか。

一か八か…

魔法使いから間を取り、彼女のものらしき机から、定規を手取る。
向上した回避力で弾幕を避けながら間を詰める。

「武符『アルレベントクラツシュ』!!」

定規を魔法使いに向かつて振りかざし、思いつきりぶつける。

「ツ!?!」

魔法使いが倒れた。

「じゃあな。」

「…て!寝てるし!」

※その頃霊夢は※

2回の奥から、メイドが一人現れた。人間だ。

「私は十六夜咲夜。お嬢様には近づかせませんわ」

「あつそう? 私は博麗霊夢。さっさと通しなさい!」

楓は大丈夫でしょうね?

あいつ実践も積んでないし…

まあいいわ、ラスボス倒してさっさと助太刀するわよ。

「行きますよ博麗の巫女。」

「望むところよ人間だろうと妖怪だろうと異変解決を邪魔するなら容赦しないわ」
「幻世『ザ・ワールド』」

「霊符『無想封印』」

「チッ」

「あんなかなかしづといわね」

「そちらこそ」

「あーもうウツザ！」

「神霊『夢想封印 瞬』!!」

またたく間に弾幕が飛び交い、メイドを囲う。

「どれだけ早くてもどれだけ強くても刻を止めれば皆同じ。」

その途端 すべての動きは止まり、メイドのみが歩きます。

メイドはナイフを取り出し私の首にかける。

メイドは私の首に向かってナイフを振る。

「ふふっ」

「何？」

メイドが答える。

「私をそんな攻撃で倒せると思う?」

「あなたの首よく見てみなさい。」

「はッ!」

メイドの首には無数の針が向く。

「きやつ」

「進ませてもらおうわよ。」

紅魔館の魔法少女 再投稿

「ふふっ巫女が入り込んだようね。」

「うん…お姉様こんなことして大丈夫なの？」

「幻想郷では異変を起こすのが我々上位に立つ妖怪の使命だとやつも言っていた。まあ私もこの手のことは気に入らんがな」

「あとねお姉様、もうひとり誰か入ってきてるんだ。」

「そう。なら…お相手してあげなさい。フラン」

「はーい！私にかかれればきゅっとしてどっかーんだよ」

※

「霊夢！そつちは大丈夫か？」

「楓そつちこそ、へボしてないでしょうね！」

「もちろん。」

ガサッ

「誰？」

「ねえお兄さん？」

金髪で、小さくて弱々しい羽を飛ばたかせた少女。

「なんだい？お嬢ちゃん。」

「私の玩具になつて遊んでよ。」

「いいぜえ。御飯事でも積木でも。」

「おま血肉の試食ま死体の山づくりごとともつみきもどつちもやりたい！」

「そうかなら勝負して勝つたら遊んでやる。」

「わかつたいよ！本気でどうぞ！」

「向上していた脚力を攻撃力に変換！」

「お兄ちゃん行くよー！」

「きゅつとして〜！どっかーん！」

足元が壊れて地下に落ちる。

「あんた何落ちてんのよ！」

霊夢が空を飛びながら言う。

「俺飛べねんだよ！」

「お兄ちゃんこれで終わり？」

「まだまだ！」

落ちていた瓦礫を手にもち身を構える。

少女が地下へ降りてきた。

「禁忌『クランベリートラップ』」

避けて避けて…

グハッ

「食らっちゃまった。」

右腕に深い傷が…

「ちよつとあんた大丈夫!?!」

「お兄ちゃん私の勝ちだねー」

「いやまだだ。」

「変換『重力重化』」

天井が抜け少女に向かって落ちる。

「こんなんじや私を倒せやしないよ」

そう少女は言い拳を握る。落下する瓦礫を砂に変え狂気の緋に染まった目で俺を睨む。

「でも…私を本気にさせたね。」

「ッ!!」

「変換『重力重化』」

少女に八百万の重力がかかる。

「ひゃっ！」

少女が怯む。

「変換『重力夢幻』」

「きゃー！」

重力があるゆる方向かかる。

「解除」

途端に重力は戻り少女は床に落ちる。

「よくやってくれたねお兄ちゃんいやお兄様。」

「へ？…お兄様？」

「うん。私が負けたの久しぶりすぎる。尊敬してるだけよ」

「あん。なんかありがとう。」

「異変を解決するんでしょ？なら私も手伝う！お姉様はすごい強いからね。」

「ありがとう。俺は楓。よろしくな」

「私は、フランドール・スカーレット！フランでいいよ！」

「よし！フランか…いい名前だな。」

そう言い手を固く繋いだ。

※

「この先に、ラスボスがいるってわけか（この先に親玉がいるわけね）」

「レミリアお姉様…楽しんでませてもらおうよ！」

ガチャ。

「ようやく来たわね博麗の巫女。」

「この霊夢様が倒してくれよう！」

「と、あなたは？」

「俺は徒花楓。外来人だ。」

紅魔館のお嬢様

「俺は徒花楓。外人だ」

「そう？でフランはなんでそこにいるの？」

「私もお兄様たちとお姉様と遊ぶ。」

「そう？なら3人一緒にいかかってきなさい！」

「紅符『不夜城レッド』」

「かかってきんしゃい！霊符『博霊幻影』！」

「うっわ高レベルやな」

思わずあつげにとられる。

目で追いかけるのがやつと、いや正確にはちよこちよこ追ってるやつが変わってるんだが、とにかくすごいスピードで弾幕が打ち消し合う。

「あたしたちも負けてられないね。」

「禁忌『レーヴァテイン』!!」

フランが手を振ると小さな拳の中に大きな大剣が現れる。

「うおおおかけえ」

「靈力を火力に変換！」

おーすげえスピードで走れるぜ！

そのままレミリア向かって突進

コケる！

「お兄様！」

「あんたいいところで何してんのよ！」

火力が高くて追いつけなかったか、まあいい

「割増していた火力を殺傷力に変換！」

「フラン！」

「お兄様はい！」

そう言つてフランは、俺にレーヴァティンを渡す。

「武符『アルレベントフレア』」

握った大剣に炎が灯り窓の少ない広間を太陽のごとく照らす。

「Phase 1! 『斬撃』!!!」

燃えゆる剣はレミリアへと突き進む。

「神槍『グングニル』」

レミリアの手に中に朱い槍が現れる。

レーヴァティンはレミリアの首を捉える。

カキン！

すごいスピードで攻撃を止める。

「クソッ！」

「まだまだだね。紅符『ブラッディマジックスクウェア』」

弾幕が再び現れ、炎をかき消す。

「これで終わりね。」

「これで終わり？何いってんだ！武符『アルレベントフレア phase 2 『魔撃』!!』」

レーヴァテインを床に突き刺す。

床にヒビがはいり燈色に染まる。

広間の中に無数の火柱が立つ。

更に深く突き刺し、一層炎は強くなる。

そこで意識が途切れた。

※霊夢※

「あんた、なんかすごいのだしてたけど、ねえ、何寝てんのよ。」

「お兄様すごかった…」

「てあんた…まさか倒れてるとかじゃないでしょうね。」

「お兄さま…」

「うぐ…」

「何よ。生きてるじゃない。」

「ゲホッ」

楓が血を吐く。

「重症ね」

医者のところに行きましよう。

「あなたなかなか強かったわね。」

「あっありがとな…」

「お兄様お大事に！また遊びに来てね！」

「おう」

「元気そうね、さっさとお医者さんのところに行きましよう」

「ああ」

く霧の湖く

「おい！外来人！」

「あん何よあんた！」

「れいむあなたはかんけいない！」

「だから何よ」

「あたいと勝負しろ！」

「チルノちゃん頑張って！」

「大ちゃんあたいにまかせて！」

「めんどくさいわね。行っただ行っただ。」

「なに？ なめんじやないよ！ 冷体『スーパーアイスキック』!!!」

「ほんと！ めんどくさいわね！ けが人に攻撃とか馬鹿じやないの？」

「いいぜ」

「ちよつと楓何いつてんの？ あいつよりバカなの？」

「霊夢。御札貸して。」

「はいどうぞ」

「模倣『夢想封印』！」

楓の霊力が御札に籠もるのがわかる。

1枚の御札が氷精に向かい放たれる。

そして霊力が御札の周りに集まりていきます数百枚の御札へと姿を変える。

「うぎやあああああああ！」

「チルノちゃああああああん。」

「楓すごいわね夢想封印を打てるなんて。」

「まあな」

「さあ永遠亭へ行きましょう」

てゐだ! 毘だ! もこたんだ!

「もう大丈夫よ」

「あなたは?」

知らない天井ここが霊夢の言っていた永遠亭?なのかな。

目の前に立っているのは、赤と青のツートーンカラーの服に白衣の女性だ。

「私は八意永琳。この永遠亭の主治医よ。」

「あれ傷が痛くない?」

「ええもう普通に動いていいわよ」

あんなにえぐれていたのに、きれいに傷ひとつない。

「ありがとうございます!失礼します!」

そして永遠亭を出ようとしたら、

「うぎゃ!」

「ひっひっひ」

落とし穴?

「引っかかったあー!」

「何だお前」

「てゐだよ因幡てゐ。あんたこんな罫に引つかかるとか、妖精でももうちよつと手こずるのにい？」

「うるせえさつさと出せよ」

「嫌だよ〜ぶつぶぶのぶ〜だ」

「むつか」

「悔しかったらたおしてみな〜」

「靈力を、跳躍力に変換！」

十メートルほどの深い穴から、ひとつ飛びで抜け出す。

「永遠亭で休んでる間に思いついた攻撃を受けてみる！」

土を手に取り、てゐに向かい投げる！

やがて土は前に進む力が弱まり、地面に引つ張られる。

「対象にかかる重力を、攻撃力に変換！」

土はまとまったまま中に漂う。

それを掴み、てゐに再び投げる。

「土？しよつぽー！」

だがてゐは土がかかるとたん倒れる。

「なん…で?…」

じゃあな

※迷いの竹林

「ああ」

「うん」

「おう」

「なぜこうなった」

周りは竹ばかり、目の前には小さな岩。

こつちに行けば、出れるはず…

※数分後

「もう少しで出られ…」

岩…

さつきここに来たような?

来てるなこれ回って来たのか。

さつきはこつちに行つたから、あつちに行けば、

※数分後

「今度…」

岩…

はい！迷いました！

とほほ…

「あんた何してるんだい？」

「あつそのあの…」

「ああ迷子か…」

「はっはい。そそそういうことに…なります。」

そこに現れたのは！

白いシャツに赤いスボン、白いきれいな髪。

「私は藤原妹紅。君の名前は？」

「俺は徒花楓。」

「人里まで案内するよ。ついてきな。」

「あ、ありがとうございます。妹紅さん」

「ああ敬語じゃなくていいよ。友達だろ？」

「はい！じゃあよろしく妹紅！」

「おうよ」

※人里

「妹紅ありがとな!」

「じゃあな!」

「お楓! 異変終わつたのか?」

「おつ 魔理沙じゃん。もちのろんよ!」

「霊夢から聞いたぜ! すげえ技出したんだって? あたしにもみせてよ!」

「じゃあ神社で弾幕ごっこでもするか?」

「わかつた! 先に行つて待つとくぜ!」

幻想郷意外と楽しいな。

友達もできたし、向こうとは…いや、あのことを思い出すのはやめよう。

よし博麗神社行きますか!

V S 魔理沙

「よし霊夢頼んだぜ！」

「わかった」

「ルールは、使用スペカは互いに3枚。制限時間は5分。あたったら負けだ。いいか？」

「おう！じゃあスタートだぜ！」

「早速行くのぜ！『マジック・ミサイル！』」

緑色の魔力弾が魔理沙のスカートから飛び出し、不規則に波打ちながらこちらに向かってくる。

今回使用が許可された武器、それはこの針と御札だ。

「こちらからせめさせてもらうよ！」

「おう！」

「恋符『マシンガンスパーク』!!」

無数の弾幕が降り注ぐ。

「模技『夢想封印』！」

そう言い御札を一枚投げる。

御札から放たれた、霊力が、新たな御札を形作る。

薄く向こうが透けた御札が、一気に魔理沙に向かって突き進む。

「これ霊夢の技じゃねえか！なんでだよお！」

魔理沙の攻撃を打ち消す。

本体の御札は未だ魔理沙に向かって進んでいる。

「空気の抵抗力を霊力に変換。」

空気抵抗がなくなり、御札は一層早く進む。

御札には取り込まれた霊力が再び放出され、御札になる。

「こんなんじゃ負けてたまるかだぜ！」

「星符『ドラゴンメテオ』!!」

魔理沙の背後に龍が現れ、周りを弾幕が囲む。

次の瞬間超高速で弾幕が空を切る。

「武符『アルレベントフレア』!!」

「今度は何だぜ!?!」

「Phase 1『斬撃』！」

針に炎が灯り短剣の形になる。

炎でできた持ち手を握り、魔理沙に斬りかかる。

「ただの針が剣になるのかよ！」

炎針えんけんが魔理沙をかすめる。

「残念だったな！」

「phase2『魔撃』」

紅霧異変のときと違い、炎は渦を巻き周辺を焼き尽くす。

「ちよつと楓！神社が燃えるじゃない！」

「すまん！霊夢！」

攻撃が不十分だがまあいい

「phase3『砲撃』」

針は剣の形を失い、炎は大きな筒状に変化する。

バババババババ！

境内をえぐり魔理沙に、一発の巨大弾をぶつける。

「うぎやあああああああ！」

魔理沙はそのまま気絶してしまった

（博麗神社茶室）

「おいおい、楓！スペカ4枚目は聞いてないぜ！」

「俺2枚しか使っていないけど？」

「どう考えても4枚だろ！夢想封印となんか切ってきたやつとぐるぐる回ってたやつと最後のでかいやつ！4枚だろ！絶対！」

「夢想封印以外、全部で一枚だけ。」

「武符『アルレベントフレア』は5段階の攻撃があるんだ。そのうちの三段階目で魔理沙が倒れたわけ。」

「なんかすげえな……」

「それじゃあ、楓？……さっさと境内の大穴。直してね？」

「えー…… わかったよ……」

その後半日かけて俺は『砲撃』によって空いた大穴と焦げた井戸の補修に努めた

妖怪の山編 I

「霊夢う！大変だぜ！天狗と河童が戦争するらしいのぜ！」

「はあ？知らないわそんなこと。妖怪同士の喧嘩でしょ？私が構ってられるわけ無いでしょうが私は忙しいの。」

そう言い霊夢はせんべいをボリボリ食べ座布団を枕代わりに横たわる。

あたしは霧雨魔理沙。

普通の魔法使い。

「どっこが忙しいのぜっ！」

で具体的に何が起きたかというとな、

河童の打ったミサイルが天狗の家に着弾し、天狗から死傷者が出た。

それに怒った大天狗が玄武の沢に攻め入ったのが始まりだ。

その後も戦いは続き今も、妖怪の山中腹にて、戦は勃発している。

そして………起こってしまったのだ。
博麗の巫女を怒らせる出来事が………

翌日未明。

どちらかは定かではないが、この戦争による、被害が人に及んだ。

「楓、魔理沙……行くわよ……」

その被害は、博麗の巫女として許してはならなかったものだった。

人里の人間が里外に出た際に、亡くなった。

仏が見つかつたのは午前も終わる頃。

そして短針が十二の頃をすぎた時。

霊夢、魔理沙、楓は神社を出て妖怪の山へと向かった。

く妖怪の山く

高速で霊夢と魔理沙が飛んでいく中、俺は歩いて妖怪の山を登っていた。

「霊夢たちはいいいなあ空が飛べて…」

「あなた誰？」

「俺は徒花楓。」

「山に入るの？」

「ああ何やら河童と天狗が戦争をしてるらしい。」

「あなた人間でしょ？危ないよ…」

「…ありがとう心配してくれて。でも大丈夫。俺強いから！」

「なら楽しめそうね。」

「へ？」

「私は秋静葉。この山に付きし紅葉の神。」

「勝負しろってことだな…」

「秋符『フォーリンブラスト』」

まだ夏も終わらず、暑苦しい山にもみじやいちよういろいろな樹木が色づく。

葉は落ち足元に積もる。

「お前の能力か?」

「そうだけど?」

弾幕を、避けながら会話する。

「綺麗だな。」

「…:」

スペカは終わり、通常弾幕へと変わる。

なんで会話ができてるって?

ぬるいんだよ。明らかに。

「葉符『狂いの落葉』」

またスペカか…

途切れた途端に次のスペカが発動される。

たがこちらも薄い。

その時、一気に弾幕の量が増える。

あらゆる方向から弾幕が降り注ぐ。

「…秋符『オータムスカイ』…」

「…!?!」

スペカ発動中にもう一枚…

俺の背後には、静葉とよく似た、女の子が。

「静葉。まだまだじゃん」

「私は秋穰子。姉がお世話になってようで？」

「2人……」

二人からの弾幕を避けながら構想を練る。

まあこれでいいか。

「靈力を脚力に変換！」

一気に進み静葉と穰子を一直線になるように動く

「変換『重力夢幻』」

落ち葉が持ち上がり、標的に向かい、一直線に伸びる。

「模技『マスタースパークのような閃光』」

舞い上がった落ち葉は光りだし、名の通りマスタースパークのような光が広がる。

もちろん相手への殺傷もつけてある。

「うわああああ！」

秋姉妹は吹っ飛んで、山の奥の方へと消えていった。

妖怪の山編 II

秋姉妹をあとにして、すっかり見えなくなった、霊夢を追う。

「なあ」

「？」

どこからか、声が聞こえる。

「その人間。」

「？」

「こっちだぞ」

声の聞こえた方を振り向く。

「そつちじゃないぞ。こっちだ。こっち。こっち。」

再び振り向く。

「だからそつちじゃないって。こっちこっち。こっち。」

またも振り向く。

「そうこっちこっち。」

そのまま歩きだす。

「あくそつちじやない。こつち！　もういいや。」

　　そう言い茂みから、少女が飛び出す。

「私は河城にとり！河童だよ。」

「か…河童…」

　　そこに立っていたのは、青色の上に皿…じやなくて帽子。

　　甲羅…じやなくて大きなリュックを担いでいる。

　　河童つてもつと違うような…

「か…河童？」

「ああこう見えてあたしも河童だよ。君外来人だよね？」

「そうなのか。そうなんだろう！」

「あゝ」

「やっぱり！聞きたいことたくさんあるけど、まずだ！なんでこんなところにいるんだ？」

「異変が起きたらしくて、霊夢と一緒に、調査（霊夢いわく殲滅）をしに。」

「霊夢…あ！博麗の巫女か！異変解決をしようとしているのなら、心配はいらなそうだな！」

「で、異変って何が起こったんだ？」

「河童と天狗が戦争…してるらしいんだが、」

「あ…そのこと…か」

「あれはだな…向こうが、河童のアジトを攻撃したから始まったんだ。」

「でも…霊夢は河童のミサイルが、天狗の家に直撃したって…」

にとりは腕を組み、ため息をつく。

「ミサイルが天狗の家に落ちたのは本当さ。」

「でもね。それは戦争が始まった後のことなんだ。」

「え…?」

「こつちも困ってるんだ。冤罪で、戦争なんかやりたくないつてのに。」

「俺が解決してくる。」

「ほんとにか!」

「ああ」

「それとさ外来人なんだろう?事がついたら玄武の沢に来てくれ。色々聞きたいことがあるんだ!」

「おっけ。俺は徒花楓。よろしくな。」

「改めて河城にとりだ!よろしく盟友!」

山の少し高いところではまだ銃声が鳴り響いていた。

天狗の集落。

「わりの霊夢遅れた。」

「いいわよ。大丈夫。」

「派手にやりあってるな。」

「そうなんだぜ。」

「徹底的にぶっ潰してやりましょ。」

「霊夢さんこわい（のぜ）…」

霊夢にもあのこと言っておかねえと。

？少年説明中？

「でそれがどうしたのよ。」

「魔理沙？その情報はどこからなんだ？」

「えーと…確か誰だっけな…厄神とかいうやつだ。」

「俺はそいつに聞いてみる。霊夢たちは待ってて！」

霊夢が黙ってたつとくわけないけども！

樹海にて

「おーいやくじーん！」

「…」

人っ子一人いないな。

まあ人がいたらそれはそれでな。

空中をノロノロと飛びながらあたりを探す。

？少年頑張つて搜索中？

あそこに人影…

あれ？魔理沙の言つてたやつと似てるな。

「浮力を霊力に変換！」

急降下し、地面に着地する。

「きゃー！」

少女が叫ぶ。

「俺は徒花楓。異変について、魔理沙に話したのは君？」

「…」

沈黙が続く。

やつと落ち着いのか、少女の口が開く。

「ええ。」

「それはほんとに真実か？」

「…」

「天狗に嘘を流せて。山の妖怪である以上天狗には逆らえないの。」

「じゃあ本当は…」

「言えない…」

「言えない。」

「厄符『バッドフォーチュン』」

弾幕は降り注ぐ。

急な攻撃にこちらは攻撃できず、一方的に攻撃を受ける。
そして少女は消えた。

妖怪の山編 III

「霊符『夢想封印』！」

なぜこうなった。

たかが妖怪同士のいざこざよ。

何故私がこんなに手こずる。

魔理沙だっている。

楓も私ほどではなくても、弱いわけじゃない。

なのにどうして、こんなことになった…

遡ること半日。

日が昇り、ちようどもう少して頂点に辿り着く。

楓は、赤緑の少女を深追いはせず、先に戦争をやめさせるといふ決断に至った。力を変換し、山を登る。

このときはまだ、誰もあの事態をよそくできていなかった。

「霊夢！魔理沙！ 逃した…」

「わかった。 とりあえず、今は、この戯れごとを終わらせましょう。」

その後、話合いによる解決を試みたが効果はなし。

「なら」

「武力を行使してむりやり押しさえつけるしか…ないよう（ね）（だな）（だぜ）。」
3人の声が合わさる。

「私も助太刀しますよ！霊夢さん！」

「文！あんた！なにしてんの…」

「私も正直言うところ、戦争には反対なんですよね。」

「ということで両族平和をもたらすために！」

そこに立っていた（正確には飛んでいたが）のは白いブラウスに見を包み、四角い帽子を被った少女だ。背中には、鴉野のような黒い翼が生えている。

「おや！あなた外来人ですね！妖精が噂してたのを聞いたんですよ！よかったですら取材を
！」

「あーあのーどちら様で？」

「あやや。失礼しました！ブン屋の射命丸文です！」

「俺は楓。よろしくな。」

「それで取材の方は？」

「いいよなんでもどんと来い！」

「はあー」

霊夢がため息をつく

「あんたたちね！今は異変解決が先でしょ！」

「は…！」

「ぶっ倒してくれる！『パスウェイジョンニードル』！」

大量の針が河童と天狗に向かって降り注ぐ。

次々に戦闘員たちは倒れていく。

「行くのぜ！恋符『ノンディレクショナルレーザー』！！」

レーザーが地を割り、川から水が流れ込み、新たな川ができる。

「ちよつとやりすぎたのぜ…（汗）」

「夢符『スリープスパーク（仮）』！」

これは模技マスパを一部変えたもの。触れたものの気力を失わせ、眠りに墜ちさせるというスペカだ。

天狗は一気に眠りに墜ち文字通り墜ちる。

後ろに気配。

霊夢と俺が振り向くとそこには、緑色の髪の毛の女の子が立っていた。

その手に、文を持ち…

「あんた！何者！」

しばらくの沈黙

「私は東風谷早苗。新たに、この幻想郷を支配するもの。」

「はあ？」

霊夢が呆れたように、言葉を返す。

「あなたが博麗の巫女ね。幻想郷は私たち、そう守矢神社のものよ！」

「はあ？」

先程より強く、霊夢が返す。明らかに怒っている。

「それが嫌なら、山の頂上まで来てみなさい。幻想郷が欲しければ、力づくで奪ってみな
やうー！」

そう言い、緑色の髪の女の子―東風谷早苗は消えた。

「私別に、幻想郷欲しいとかそう言うんじゃないんだけど……」

「でも……お仕置きしてやらないと気がすまない。」

博麗の巫女を。

この幻想郷を。

私を怒らせたことを。

後悔させてやる。

妖怪の山編 IV

水は飛沫を上げ空気は切れ、妖怪の山を流れる川沿いに、霊夢は加速する。その前に、先を隔てるものが現れた。

白狼天狗だ。

「わが名は犬走棍である！博麗の巫女！おまえはとおさ……」

霊夢は弾幕一つ打たず、棍の横をすり抜ける。

「えええ〜！」

「楓！後ろに乗るのぜ。」

魔理沙が、呼びかける。

「おう。ありがとな。」

魔理沙は乗っていた箒から前の方にずれ俺はその後ろに乗る。

ゆっくりと浮上したかと思うと、箒は暴走して、右に行ったり左に行ったり。

「落ち着くのぜ！」

しばらくするとなれてきたのか段々と安定してくる。

「よおしいい子だ！行くぞお！」

そう言い箒は急加速して、先に行った霊夢を追いかける。

しばらくすると、目の前に白色の髪をした女の子がいる。

短髪で男と言われれば、納得も行くような感じだが、あのもふもふ気持ちよさそう。

「わが名は犬走椛である！今度こそは絶対とおさ……」

「恋符『マスタースパーク』！」

光線が緑の山を彩る。

「えええ〜！」

椛っていうのか……今度もふもふしに行こう！（は？）

霊夢 side

「来たわよ。」

「意外と早かったですねえ？」

「とつととやられる。害虫が。」

「害虫とは失礼な。」

「どうでもいいわ。幻想郷では、神も妖怪。巫女として退治するのは当たり前でしょう

がー」

「あんたたち妖怪は！人間にとって害虫なのよ、」

「そしてあんたたちみたいなのは幻想郷にとって、害虫なのよ！」

「害虫、害虫と失礼にもほどがある。早苗やってしまいなさい。」

「神奈子様わかりました！」

「蛇符『雲を泳ぐ大蛇』」

弾幕が降り注ぐ。

「神技『八方龍殺陣』！」

弾幕をかき消し相殺にする。

「秘術『グレイソーマタージ』」

「神徳『五穀豊穰ライスシャワー』」

「2枚切り!？」

「妖器『無慈悲なお祓い棒』」

お祓い棒で弾幕をはたく。

弾幕は未だ残っている。

「でも避けられないことない。」

弾幕を華麗に避け

「神霊『夢想封印 瞬』!!」

高速で移動しながら、弾幕を放つ。

「こちらもどんどん行くよ!大結界『博麗弾幕結界』!!!」

弾幕が集まり、分厚い膜を霊夢の周りにはられる。

「ツ!?!」

早苗は驚いているようだ。

自分の放った弾幕が全てその膜に弾かれたのだから。

「今度はこっちの番よ!」

「こいつで型をつける!」

静寂が続く。

本当はほんの一瞬だ。

だがこの場にいるすべての者にこの時間は永遠と言っても良いほど長く感じられた。

『無想転生』

その静寂は続いた。

誰もがその長さに気づけなかった。

誰もがその短さに気づけなかった。

静寂が止まる。

地に立っていたのは、赤巫女でも青色の巫女でもなかった。

「我こそは戦神……………」

八坂神奈子であるぞ。

妖怪の山編 V

我は戦神。

八坂神奈子であるぞ。

「隙あり！」

数分前

俺は徒花楓。

魔理沙とともに妖怪の山の頂上にある守矢神社に向かっている。

「そろそろ山頂だぜ」

「魔理沙ありがとな。」

鳥居が見えてくる。

そして柱に囲まれた、中央に胡座をかいた女性の姿が。彼女こそが、この妖怪の山異変のおそらく最後の敵。

「霊夢は……」

「!?!」

俺と魔理沙は声を失った。

さっきの青色の巫女と。

赤い巫女が倒れている。

そう霊夢は、

倒れていた。

「うがあああああ！」

雄叫びを上げ神奈子にむけ殺意満々で箒から飛び降りる。

いきなりの襲撃（九割が雄叫びにだが）怯んだ神奈子にむけ魔理沙の箒からむしつた藁を突き刺す。

「隙きあり！」

俺は、能力を行使した。

これは弾幕ごっこではない。

だからこそ使える技だ。

相手は神は神でも神霊という類だ。

霊と聞いて思い出した。

俺の能力だ。

『霊を操る程度の能力』

その能力を行使し、神奈子を操る。

「？」

神奈子はとっさに弾幕をはなとうとしたが、できなかつた。

「何!？」

「俺の能力。それは霊を操る程度の能力。神だろうが、神霊であるかぎり、俺はお前を操作できる。」

「!？」

神奈子は驚いたまま動かない。

「はぐっ」

「おい！楓！大丈夫か！」 魔理沙かな？誰かが箒から…

俺は意識を手放した。

永遠亭

「本当にごめんなさい！」

目覚めると、霊夢は、泣きながら頬を真っ赤にして、俺に謝った。

「え…なんで…謝るの？」

「私が下手にやりすぎて無想転生なんて切ったから…楓が…」

「あなた流石に無理しすぎね。魔理沙がすぐに運んだからいいものを…このままだったら死んでたわよ。」

「あ魔理沙ありがとう。」

「よかった…よかった…楓が生きててよかった…」

その後日最も軽症だった魔理沙と妹紅、咲夜の三人が妖怪の山に向かった。

夜まで長引き心配に思った俺は、紅魔館より増援の派遣を要請した。

増援部隊はレミリア、フラン、美鈴だ。パチュリーは風邪で自宅待機である。（小悪魔は看病）

夜が更ける頃には決着がつきスカーレット姉妹意外はズタボロで帰ってきた。（咲夜が全力でレミリアを守ってたため無傷だったと魔理沙は語る。）

後日傷も癒え、博麗神社で寛いでいると、

小柄な少女が頭を下げる。

いきなり来て土下座！

「大変申し訳ありませんでした！」

「うちの莫迦どもが迷惑かけて…」

「あ…はい…」

「まあ顔上げて。」

「はい…」

「我は洩矢諏訪子。外界から来たし土着神であります。」

おう丁寧語。

「諏訪子かいい名前だな。」

「えくえへへ……じゃなくて申し訳ありませんでした。」

きよろきよろした目のついた帽子をとって深々と頭を下げる。

「あうちの霊夢がやりすぎたみたいで……こちらからも……」

頭を下げ、羊羹（これについてはいつか話すときが来るかもしれないな）を丸々一本差し出す。

「大層なものじゃないですけど。」

「あ、お気遣いありがとうございます。」

神というだけあって幼い体でも、口調はものすごく丁寧だ。

そして、守矢神社とは友好関係を持った。

霊夢は未だに怒っているようだが

守矢神社は幻想郷の主導権を放棄。

今は妖怪の山でひっそりと暮らしながら、信仰集めに尽力している。

妖怪の山編
完結

魔法修練

紅魔の月が登る頃。

よりかなり前。

昼下がり俺は紅魔館に向かっていた。

「歩くと遠いな…」

博麗神社から人里を通り、魔法の森を抜ける。

く霧の湖く

「おい、お兄ちゃん！」

「？」

こちらに向かつて走ってきたのは、黒い膜を覆った、妖怪。
幻想入りして初めて出会った妖怪だ。

彼女の名は闇の人食い妖怪『ルーミア』。

ゴテ!

ルーミアが思いつきり転げる。

「お兄ちゃん!久しぶり!」

「おう!ルーミア久しぶりだな。」

「お腹すいたのだ!」

「そうか。ならこれやるよ。」

といい諏訪子にも渡した、羊羹を差し出す。

「わーいやったのだく!」

はぐっ!

ルーミアが思い切り羊羹に食らいつく。

かわいい。

その後チルノの喧嘩を買ってやったり。

ミステイアとかいう妖怪に絡まれたりした。

く紅魔館 門前く

「お、楓さん！なにしに來たんですか？」

紅魔館の門番 紅美鈴が口を開く。

「よお美鈴。今日はパチュリーに魔法を教えてもらおうと思つてな。」

「そうですか。あの今度手合わせしてくれませんか？」

「いいよ。いつでもかかってきんしゃい！」

「はい！」

そんなふう駄弁つて紅魔館の中に入る。

く紅魔館地下図書館く

「ヴワル魔法図書館へようこそ」

「よおパチュリー！お前とは異変ぶりか…」

「魔理沙から話は聞いている。魔法を教えてほしいのね。」

「ああ」

「でも無理そうね。あなた魔力をほとんど持つてない。

しそうね。」

「それなら…」

「靈力を魔力に変換！」

ごめんなさいだけど難

「あれ？魔力が一気に……
あなたの能力かしら？便利ね。」
「照れるな。」

「魔法を使う上で大事なこと、それは体を流れる魔力を感じることに。そしてイメージよ。」

「ふむふむ」

「試しに魔力弾を作ってみて。」

全身を駆け巡る魔力。

うぐぐ、うぐぐ、

なんか流れてる……感じがする。

いやこれ血じゃね。

全身駆け巡ってる血じゃん。

うぐぐ、うぐぐ、

魔力の流れがわかる。

これが、魔力……

手のひらに丸を浮かべる。

魔力が固まり球体になる。

「撃ってみて。」

魔力弾を握り振りをつけ投げる！

魔力弾はひよろつと飛びすぐに落ちた。

「まあ出せただけ……良しとしましょうか。」

く紅魔館旧地下牢く

前来たときはあんなにジメジメして暗かった地下牢が今ではなんの変哲もない可愛
い少女の部屋と化している。

「フラン！遊びに来たよ」

「あ！お兄様！」

「なにかしたいことある？」

「えーとね。えーと……」

かわい。

「あ！積み木！」

「じゃあ積み木であそぶか。」

フランは嬉しそうに部屋の奥にいきおもちゃ箱を持ってくる。

「よしいしょ」

かわい

「じゃあお城作ろ！」

「おう！」

えーと積み木の結果だが。

絶望的な出来栄です。

俺が作ったところはまだ城に見えなくはないんだが、

フランに関してはもう何にも見えないというか。(自称)屋根の上にあるこの丸いの
なによ…

「これはね…なんだっけ？」

かわよ

かわよ

しばらく遊んでいたら日が暮れ、夕食の時間になった。

「お兄様も一緒に食べよ！」

「俺も食べてつていいの？」

「ええ。もちろん」

俺とフラン、そして咲夜の三人で食堂へ向かう。

く紅魔館 食堂く

「あなたも紅茶はいかが？」

えーと今晚のおかずは人肉です。

はい共食いになります。

咲夜…普通に食べてますけど…

「私の血が飲めないの？」

それ飲んだら誤解が生まれる発言!!

てかアルハラじゃなくてチハラじゃん！

チハラつてなんだよ

「はい…いただきます。」

ゴクリ

不味くはないが…

美味しいと言われると首を傾げるお味だ。

「それ

レミリアが俺のグラスを指差す

『咲夜の血よ』

「へ？」

手に持っていたグラスを思わず放した。

ガツシャットン！

咲夜はあつげにとられ持っていた食器をすべて落とす。

「え…そんなにシヨックだった？」

シヨックよりも衝撃で、体が動かないんだが。

第2章 湧き出る地霊とムシフエツシヨナル 上海人形

魔法の森。

幻想郷において森といえどここしかないだろう。

胞子が飛び交い妖怪は潜む。

人間は立ち入らない。

たが一部の人間は、ここに立ち入る（というか住んでいる）

彼女の名は、アリス・マーガトロイド…

魔理沙の家に上がらせてもらえることになった。

彼女の家は魔法の森の奥にあり、ほとんどの人はたどり着けないという。

魔理沙の家は霧雨魔法店という名でなんでも屋をやっている。

（そんな奥にある店に客が来るか）

箒の後ろに乗らせてもらったが不慮の事故で（いやあれは事件だ）俺は箒から落ちた。
（魔理沙は気づかない。）

俺が埋まったのはある人物の家の前だった。

「オマエダレダ！」

「お前こそ誰だ！このちび！」

「ナニガチビダ！ワタシハシャンハイダ！」

「そうか俺は楓。」

「上海どうしたの？」

黄色い髪に、きれいな青い服。

かわいいというより背が高いのもあつてか綺麗と感じる。

「ひどい怪我ね。休んでいきなさい。」

「ありがとうございます。」

何この人優しい（どっかの腹黒と違って）

紅茶が出る。

「オキヤクサン！コレハシャンハイガイレタンダ！カンシャシロ！」

「ありがとな…上海？」

「ワタシハシヤンハイダ!!!」

「で何があつたの？」

アリスに問いかけられる。

「実は…」

?少年説明中?

?少年説明中?

「ああなるほど…まあ予想の範囲内ね。」
まじすか。

?少年治療中?

「あつ魔理沙じゃない。楓ちゃんが…」

「もらつてくぜ。」

「あつ…」

「どうしたんだ？アリス」

「また魔理沙よ。その顔だと知らないようね。魔理沙あの娘、盗癖があるのよ。」

「とりかえしてくら」

「魔理沙！待てえ！」

「追手が来てるだと！」

「ここは弾幕で撒くか！恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙は片手に魔導書を持ったまま、箒に立った体制になりマスパを放つ。

「武符『アルベントレーザー』」

拾った石を投げこの通った道をレーザーが覆う。

魔理沙に石が直撃。

「石？」

マスパとアルベントレーザーが、正面衝突し相殺する。

「ツ!？」

「彗星『ブレイジングスター』」

弾幕が放たれる。

「恐怖『無双不敵』」

降り注ぐ弾幕を防ぐ。

「武符『アルレベントフレア』!!」

「Phase2『魔撃』!」

石を掲げる。

炎は石を纏い、杖の形に変わる。

杖を地面に突き刺す。

紅霧異変のときの威力の数倍を一点に集め、魔理沙の真下から放出させる。

火柱がたち、魔理沙に直撃する。

ふらふらと箒から落ちる。

それを受け止める。

魔理沙 side

ひひっ

「借りてくぜ。」

「あっ…」

アリスがあつけにとられる。

箒に跨り浮上する。

ゆっくりと上昇し魔法店のある方向へ進む。

そこに楓が追いかけてきた。

「追手が来てるだどー！」

「ここは先手必勝！」

「弾幕で（ゴリ押しして）撒く！恋符『マスタースパーク』!!」

光線が飛ぶ。

「武符『アルレベントレーザー』」

楓がレーザーを放つ。

レーザー撃てるとか消えてないのぜ！

頬を石がかする。

マスパと相殺

「ッ!？」

「ここは！彗星『ブレイジングスター』！」

「恐怖『無双不敵』」

弾幕が一掃される。

「武符『アルレベントフレア』!!」

意識が…朦朧とし始める

箒を落した。

すーぱーみすちーうなぎやたい

魔法の森。

「お兄ちゃん！」

「おうチルノか、」

魔法の森を歩いていると、チルノが目の前に現れた。

チルノだが何故『お兄ちゃん』だなんて呼んでいるか、それについては、『チルノが敬語を覚えた話。』で語る。

かもしれない。

「お菓子目当てだな？」

チルノが頷く。

「頂戴でゴザイマス！」

「何その言い方。」

だがかわいい。

「おらよ。」

大福を一つ分け与える。

「もう少し分けていただけたいであります。」

だからどういいう敬語だよ。

敬語にもなつてねえよ。

まあ敬意は伝わりはする。(ただし俺のみ)

だがかわいい。

結論

『チルノはかわいい』

「じゃあねー！じゃなくて…えーとさらばなのじゃ！」

？

???

夜。

「もう日が暮れちゃったし。」

どうしよ。

散歩してたら日が暮れた。

やばい妖怪出るかも。

やばい。

結論

『夜の森はやばい』

そんなことを考えていると、木と木の隙間から、光が漏れ出している。

あつちになにかあるのか：

光をたどると、小さな移動式の屋台があつた。

赤い提灯には『八目鰻』と書かれている。(いまいち読めない)

「あのお〜」

屋台の暖簾?ていうのかな、とりあえず布みたいなのをめくり椅子に座る。

「あ!お客さん!……て「あのときの!」」

声が重なる。

そこにいたのは、パチュリーに魔法を教えてもらいにいつときの、鳥妖怪だった。
たしか…

「ミステイアです。」

「おう。」

「えーと楓…」

「えーとおすすすめなんかある?」

「蒲焼はおすすすめですよ。」

「じゃあそれで。」

「お待ち!」

早速鰻とホカホカのご飯を頬張る。

「んう〜」

あふあふ(熱い)

「ほへほっへふおほひふいでひゅへ」

(これとつても、おいしいですね。)

思わず両者が満面の笑みを浮かべる。

けれども彼女が姿を表すまで、気づかなかつた。

夜の森の中、男女が、ふたりきりで満面の笑みを浮かべていることを。

パシヤツ!

シヤツター音が響く。

「文!」

「あやや。気づかれてしまいましたか。でもしつかり撮れましたからねえまさかあの外来人が、夜雀と……ぐひひ……」

「……」

「恋煩『マスターズパーク』」

レーザーが、森をすり抜け、文を追いかける。

「絶対記事にするなよ!」

「はい〜!ごめんなさ〜い!」

文は鴉の黒い羽を広げ、そそくさと去っていく。

「絶対!載せるなよ!」

楓が帰ってきたようだ。

「それじゃあ私はこれで。」

「あ…文！」

楓が文に声をかけた。その顔は青く染まっている。

「なにかの間違いだ！」

「あんた見損なつたわよ。」

「俺はただ、屋台でうなぎを食べてただけで…」

楓が言訳をする。

「ほんとにいく？」

問い質す。

「その目は本当のようね。」

「!？」

開いたスキマから顔だけをひよこつと出している。

「紫？なんでここにいるの？」

霊夢は少し怒り気味。

「彼の目をご覧なさい、嘘はついてないわ。」

紫に言われ、楓の目を見る。

「じゃあ今回は許してあげる。でも次は締めるわよ。」
「怖。」

わかさぎのしおや…

「人魚？」

「そうなんだぜ！確かにこの目で見たんだぜ！」

「いるわけ…あるかもな…」

「何いつてんの。そんな妖怪聞いたことないわよ？」

魔理沙がいきなり神社に押しかけてきた。

「妖怪じゃないかもだぜ？人魚が妖怪だとだれが決めたんだ？」

魔理沙が屁理屈を言う。

「知らないわよ。」

とりあえず行ってみるか！

く霧の湖く

なんでこうしてるんだ？

手には竿

霊夢も魔理沙もしっかりと握って、浮き餌を見ている。

?少年回想中?

遡ること十分前

「これを使うのぜ!」

「なにこれ?」

霊夢が聞く。

「どう見ても釣り竿だぜ!」

「それは見ればわかるけど…」

魔理沙の、言ってることはよくわからないので、割愛。

まあ魔理沙の言いたいことは、

人魚だって半分は魚だろ?なら釣り上げればいいじゃないかと。

「言うことでいんだよな?」

「まあ粗方あつてるぜ」

?少女現実に帰還中?

「お!釣れた!」

わかさぎという魚だ。

これがまた美味なのだ。

「こつちも釣れたわよ。」

霊夢にも引きが来たようだ。

「楓！これなんて言う魚？」

霊夢が問い掛ける。

「ワカサギっていう魚だな。」

「なんで二人だけ釣れるんだよお！」

その後、

俺は十匹、

霊夢は八匹、

魔理沙は……えーと

「何匹連れた？」

「聞かないでくれよ……一匹も……釣れなかったんだぜ。」

やや悲しめ。

おいそこの人間共！

「「うわあつ！」」

「あんたらそんなにわかさぎばかり採って！他人^{ひと}のこと考えなさいよ！」

「あんた誰よ。」

霊夢は意外と冷静だ。

魔理沙がまだピクってしてるのはまあいつもどおりか。

「私はわかさぎ姫よ！」

「こいつだぜ！人魚！」

魔理沙が確信の声で言う。

「お前か！」

「あんた妖怪？」

「まあそういうことに。。。なるわね。」

「ならば退治するのみ！」

「「なんで!?!」」

(俺、魔理沙、わかさぎ姫の声がハモる。)

「霊符『無想封印』！」

バタ

ばっしやっーん

即退治されたわかさぎ姫が、湖に落ちる。

「出直してくるわ！しつかりとここで待つとくように！」

わかさぎ姫はそう言い残し湖の、そこに帰っていった。

「さあ食べましょうか。」

3人でお出かけセットを広げ、わかさぎを揚げて食べる

「美味しいな！」

美味しい。

わかさぎの味が、口いっぱい広がる。

「そうね！中々行けるわ！」

霊夢も絶賛。

「流石あたしなんだぜ！」

「お前何もしてないだろ！」

「バレちゃった？」

その後俺たちは、博麗神社でぼりぼりお煎餅食べたとき。

めでたしめでたし！

「待てつつつたろうがい！」

そして、ほのかに霧の湖を包む、わかさぎと油の匂い。
わかさぎ姫は何を思ったのだろうか。

幻想郷にUFOがやってきた？

それにしても、わかさぎ美味かったなあ。

「大変よー！」

ん？

「あっ早苗ー！」

（風神録）異変後、早苗たちとは、普通に仲良くなった。霊夢も最初こそは反対だったが、今では普通にどこ近所付き合いをしている。（全く近所じゃないが、）

「河童が大騒ぎしてるのよー！」

何が起きたんだよ。

「UFOが現れたのよー！」

UFOが出たそうです。

「UFO!?!」

霊夢とハモる。

「ねえUFOで何なのよ？」

「ああ宇宙からやってくる空飛ぶ物体のことだ。」

「なにそれ、隕石?」

霊夢ちゃんの発想がとても怖いです。

「そんな物騒なやつじゃなくて、」

「円盤みたいなのやつだ。宇宙人の乗り物らしい。」

どやっ

「なんでそんなに詳しいの?」

「そりゃまあ外の世界ではこの手の話は、よくあるからな。」

調査の為神社を出ようとすると、

「もしかして、そのUFOだけど、うちの子かもしれません。」

息を切らしながら、女性が語りかける。

その髪は、綺麗な紫色で、先が少し黄色がかっている。

「あ!あなたは!えーとなんちゃら寺の!えーと『せい』?だっけ?」

「違います。命蓮寺の住職。聖白蓮です。ひじりです!」

住職?この格好で?控えめに言ってダサいきが、住職にしては変な気が。(その後、あいつを見ることになるとは誰も思っていなかった。私は思ってた。それは今は関係ない別の話だけでも。)

「で？うちの子かもってどういうことよ？」

「うちのぬえかもしれない。そのUFOの正体。」

「ならさつさとやめさせなさいよ。」

霊夢がきつい声で言う。

「いやーこしばらくお寺にも顔を出してないから…」

「あー！」

東の空には、黒い円盤が！

「そうあれですよー！」

早苗が円盤を指さす。

「ならぶつ倒しますか。」

霊夢とハモる。

「そっくりですね。」

と早苗。

霊夢が通常弾幕を、放つ。

俺も！

「あっ」

「どうしたの？」

通常弾幕だせねえ

もうスペカでいいや

「模技『マスタースパーク 突』！」

投げた針を閃光に変え、マスバが現る。

光が消えると円盤はひよろひよると落ちる。

ゝ無名の丘

「これは…」

円盤の落ちた先には、

「お盆ね…」

地面に落ちていたのは、黒塗りのお盆だった。

なぜお盆が浮いていたか、それは、ある妖怪の仕業であった。

後に博麗霊夢は語る。

その妖怪は、覚という妖怪の仕業だと。

そして、楓たちは、幻想郷の地下深くに残る、

『旧地獄』へと向かった。

「ふふっ噂の外来人が来るのね。」

旧地獄を望む、地霊殿。

薔薇色に染まる目。

胸に抱え笑う。

古明地さとり。

彼女との戦いは壮絶だった。

核そして空～業火マントル～（地霊殿編 I）

妖怪の山。麓。

地下への調査に向かうため、間欠泉センターを目指している。

これは妖怪の山異変のときに、俺が休んでいた際、（無想転生の反動より、俺の能力の反動のほうがかいたため霊夢が先に回復した。）

霊夢が解決した異変（地霊異変）により発見された温泉湧出地だ。

なぜ旧地獄なんて物騒そうなどころに行くかというと。

覚妖怪。古明地こいしについて気になったからだ。

俺の後ろにはフラン。

ここまで来るのに、紅魔館に寄っていったら

「フランも着いてくー！いいでしょ！お兄様！お姉様もいって！（言っていない）」

言っついてきた。（咲夜が変な目してきたけど、レミリアが、オツケーだったからね。しょうがないね。）

あ！秋姉妹じゃーん

「芋美味しかったよ。」

「ホントですか！」

静葉のほうがものすごく口角上げて答えてくる。

「ああ」

「…」

穰子は沈黙。

「まあまた来年もよろしくな！」

もう秋は終わった！

あき（姉妹）の時代も終わった！

主（璃の時代も終わった！（見捨てないで。時代よ）

く間欠泉センター

よし着いた！

「フラン頼んだぞ！」

「うん！」

「禁忌『レーヴァテイン』！」

フランの手には大剣が握られている。

そのまま剣を地に突き刺す。

俺の持っている日傘の下からはみ出た羽が茶色く焼ける。（日焼けなんて心配なし！

日焼けフランちゃんも可愛い）

地に罅がはいり、人ひとり入れるくらいの隙間があく。

よし！作戦成功。

裂け目を潜り地下に入る。フランの腰を持って、下に引き入れる。

日光は日傘を入り口においてあるから安心だ。

能力を駆使して、土を掘る。

しばらくすると幻想郷ではコンクリート状の壁が現れる。

壁のパネルを取り外す。

パネルの先には地中深くまで続く縦穴があった。

そこに入る。

「フランは大丈夫か？」

「私は飛べるから大丈夫だよ。」

今フランは翼を羽ばたかせて降下している。

俺は重力のなすがまま降下している。

落下している。

やがて空間が広がり死ぬほど熱くなってくる。

「間欠泉センター下 原子炉」

「ん？侵入者はっけん！」

「えーとこういうときはえーとまあたおすんだっけ？」

「まあいつか」

その広い空間で待ち構えていたのは、黒い翼に、右手にはおみくじひくやつ？みたいな棒をつけて、胸には大きな目をつけた奇怪な鴉だった。

「核熱『ニュークリアフュージョン』」

右手につけた棒（おみくじ）を構えエネルギー砲を放つ。

「倒すほかないみたいだな！」

「模倣『夢想封印』！」

無数の札が散り鴉に向かって襲いかかる。
相殺。

スペカ名 核ってついてよな…

まさか！

鼻にグツとくる匂い。

核物質を含んだエネルギー砲だったのだ。

「フラン！目をつぶって口と鼻を塞げ！」

「わかつファ！」

言っている最中に口をふさいだため最後が変な感じになる。

「光熱『ハイテンションブレード』！」

鴉の手に剣が現れる

「禁忌『レーヴァテイン』！」

フランもスペカを発動し、小さな拳の中に大剣が現る。

鴉は右手で補助弾幕を撃ちながら、左手の剣でフランを攻撃する。

鴉の剣は片手でも使えるような剣だが、それに比べフランのレーヴァテインは両手剣だ。

片手で口をふさいでいる為いつもの力を出せていない。

「模技『夢想封印 防』」

御札がフランを囲み攻撃を防ぐ。

模技 夢想封印の特性である、破壊ができないということを利用した防護スペルカードだ。

「フランは大人しくしてろ。俺に任せろって。」

得意気にフランに見せる。

「武符『アルベレントフレア』！」

phase1『斬撃』side『劍聖』

フランから受け取ったレーヴァティンを炎が包み、日本刀のような剣を象る。核物質を吸わぬよう気をつけながら鴉に斬りかかる。

「爆符『ギガフレア』」

火力がうんと上りこちらが押される。

phase3『砲撃』side『大量射出^トダンマク^グ』

刀を象る炎は形を変えガトリングガンへと姿を変える。

細かい弾幕が、鴉を追い詰める。

「気絶してるだけだ、フラン、早く行くぞ！」

スペカを解き、フランに呼びかける。

「わかったお兄様！」

フランはゆっくりと降下し暑い原子炉を去った。

潤悪な無間嫉妬く緑眼のジェラシーく（地霊殿編 II）

「あなたこんなところになにしにきたのよ。」

「ああ古明地っていう覚妖怪を探してるんだ。」

「ただの人間があのだ霊殿に？妬ましいわね。」

鴉との戦いが終わり先に進んでいると、小さな掘っ立て小屋が見えてきた。

その小屋の住民は、黄金こがねの髪。緑色の瞳の女の子だった。

「あなたなかなか強そうね。妬ましい。名前は？」

「俺は楓。よろしく。」

「よろしく。私は水橋。水橋。パルスィ。あなたいい名前ね。妬ましい。」

一語一句妬ましいがついてくる。

だがかわいい。

霊夢によると地底のやつはみんな嫌われてるって言ってたけど、さっきの鴉もだ
ど、地底のやつって

みんなかわいい（当然）

「今あなた変なこと考えたでしょ。妬ましいわね。」

「まあ置いといて、こつちがフラン。」

「その子は人間ではないみたいね。妬ましい。」

「なんで？妬ましい要素あるか？」

「ああフランは吸血鬼だ。」

「彼女さん？妬ましいわね……」

……しゅく。

頭から煙でたか思った。

「なんだ違うのかな？なら良かった。」

なにそれ良かったってどういう意味だよ！

フランめっちゃ赤くなってるし。

「旧都まで案内するわ。あなたが探しているのはその近くにある地霊殿というところよ。」

「ありがとうパルスィ。」

「妬ましい。」

何がっ！

「本当に妬ましい」

もう言いたいだけだね！

く旧都 門く

「おうパルスイじゃないか」

「ええ」

しばらく歩くと、門が見えてきた。

門番のおつちゃんの話しかけてくる。

「そちらのお連れさんは？」

「ええ楓よ。地上から来た人間でこつちのちつちやいのが吸血鬼のフランよ。」

門番のおつちゃんそれは難いがよく、額に角が生え、

そう鬼である。

フランはその威圧に怯み俺の後ろに隠れる。

「あ、フランちゃんこの人は怖くないから出ておいで。」

パルスイちゃんフランに優しい！そしてかわいい。

なあフランそのポジ代わって…（邪道）

そして酒場？みたいなどころに連れて行かれた。

椅子に腰掛ける。

「お？人間か珍しいな。」

隣りに座っている女性が話しかけてくる。

「あなたは？鬼？ですか？」

一本大きな角を生やし蒼色の着物を纏っている。

その手には大きな盃。

「ああ私は鬼だ。星熊勇儀という。」

「あよろしくおねがいます。」

つい敬語になる。レミリアすらもタメだったのに。

「えーと徒花楓といいます。」

「でこつちがフランです。」

「吸血鬼か、久しぶりに見たな。地上によく出てきていた頃ぶりか、」

「人間だと!？」

「いるのか旧地獄に？」

「でも美味そうな匂いだな！」

観衆が集まってくる。

「勇儀さんどうせなんでそいつと手合わせしてやりなよ。そいつ人間のくせには強そう
だぜ。」

鬼の一人が持ちかける。

「おう、そうか良いか？ 楓」

「僕はいいですけど」

ということとで始まりました！ 弾mじゃなくて肉体制！

剛欲と鬼く旧地獄街道を行くく（地霊殿編 Ⅲ）

「…攻撃力に変換！」

ビールの入っていたジョッキを鈍器のように振り上げる。

「こちらは手加減しているのだぞ。」

勇儀の手には盃。

それに満杯に入った酒。

彼女はこの酒を一口分も落とさず戦うという。

蹴りが勇儀の顎に入る。

「女の顔をけるたあいい度胸だ。」

目にも留まらぬ速さで背後に回られる。

きつい一撃が背中を突く。

「ふがッ！」

「聴力を火力に変換！ 霊力を視力に変換！」

スピードも攻撃力も格段に上がっているのに足並み一つ揃わない。

「くそっ」

「正拳！」

勇儀の拳が空を切る。

「どうした？」

「うぎやつ」

衝撃波が押しかけ思いつきり押す。

「くっ」

思い出せ。

美鈴と鍛えた中国拳法を！

「ふぁー」

俺は中国拳法に適正はないらしい。

今よりは強くはなれるが、心持ちが強くなるぐらいだろう。

「でも心が違うと強くなれるものですよ？」

と美鈴は言う。

つまり中国拳法によりほんの少し強化されたかんじがする。」

「お兄様！頑張って！」

幻想郷に来てから色々と変わった。

外の世界の自分。

つまり死ぬ前の自分は、周りから当然のように嫌われ、なんの根拠もなく「死ね」と言われた。

でもここに来たら、俺が倒れたときは、めんどくさそうにしても、霊夢は泣いてくれたし、フランは今応援してくれている。

ああ幻想郷に来てよかった。

俺は敗れた。

その後、気絶していたようで、勇儀がしばらくの間ずっと見ていてくれたらしい。

「お兄様起きた!」

フランが顔真っ赤にしてこっち見てくる。

「お! 本当か! 楓よ、やりすぎてしまったな。」

同じく勇儀もまっかつかだ。

「大丈夫。大丈夫。このくらいなら治るせるから。」

「また、手合せしてくれるか? 今度は弾幕ありでもいいぞ?」

「ありがと。じゃあまた今度やろうな。」

「ああ」

露骨な尺稼ぎのコーナー！

『博麗神社の宴会』

※会話文しかありません。

一応誰が言ったのかはわかるようにしてあります。

ですがわかりにくいことに変わりはないので、おおめにみてください。

本編の話とはあまり関係ないので、読まなくても問題ありません。

博麗神社。

魔理沙（以下〈魔〉）「霊夢う〜！」

霊夢（以下〈霊〉）「何よ？ 気持ち悪いわね。」

魔「気持ち悪いとは失礼だな！」

霊「で何？」

魔「異変解決したんだろ？ 楓の復活記念も兼ねて宴会を開こうぜ！」

霊「まあそれもいいわね。」

次の日の夜。

レミリア（以下へレミ）「お招き頂き感謝します。」

霊（誘ったっけ？）

萃香（以下へ萃）「霊夢うゝ久しぶりだなあ！」

霊（言い方魔理沙と同じ…ふふっ）

魔「その言い方気持ち悪いのぜ。」

霊「あんたも一緒よ。」

魔「そうか？」

楓「これ美味しいな」

神奈子（以下へ神）この言い方なんか嫌「私達もほんとにいいのか？」

霊「いいわよ。美味しいお酒持ってきてくれたんだから。解決したんだから、仲良くやりましょう。でも」

魔「でも？」

霊「なんでまた異変起こしたのよ。」

萃「それは気になるな！」

諏訪子（以下〈諏〉）「私は何も聞かされてないんだけど？」

早苗（以下〈早〉）「えーとですね。幻想郷はいま！極度のエネルギー不足になっていま…！」

？少女説明中？

？少女説明中？

早「といった理由です。」

萃「うん わからん！」

霊「さっぱりだわ。」

魔「電気つてあれだろ！たしか！動物にそんなのがいるんだ！」

霊「なにそれ。そんな変な名前の生き物とか妖怪でしょ。絶対」

早（この人たちある意味すごい…）

楓 「え！黒じゃない!？」

早 「え？違うんですか！」

四季映姫（以下へ映） 「どうされました？」

楓 「いや、早苗が絶対に白だって！」

早 「いやいや楓さんが黒だなんて変なこと言うから！」

映 「それなら私にお任せください。私の能力『白黒はつきりさせる程度の能力』なので。」

映 「それで罪状は？」

楓・早 「…」

「タピオカの話だけど？」

映「たったびおか？」

早「最近は黒色なんですか！」

楓「そうなんだよ。前にもタピオカって流行ってたんだな。」

早「え。でも黒色ってどんなのに使うんですか？」

楓「ミルクティーとかに入れてるな。」

早「へえ、そうなんですか！」

楓「あんま美味くないけどな…」

霊「はい！始まりました！ビンゴ大会〜！」

魔「ビンゴってなんだぜ？」

霊「それについての説明は楓から！」

楓「えーとここに数字の入った玉の入ったなんか名前わからんけどあります。」

楓「そんでこれを回して出た玉に書いてある数字を言いますので、手元にある紙に言われた数字があつたら穴を開けてください。横一列、縦一列に並んだらビンゴと言ってください。以上です。」

魔「わかつたのぜ！」

レミ「面白そうね。」

紫「私も混ぜてくれる〜？」

楓「あ！紫さん！いいですよ！」

楓「それでは始めます！」

楓「5！」

レミ「ないわね…咲夜のはある？」

咲「私にもないですね…」

魔「やったのぜ！あつたのぜ！」

霊「6と4はあるのに！」

楓「12！」

レミ「どつかで見たのよ。どこにあつたかしら…」

魔「またあつたのぜ！」

霊「なんでことごとくくないのよ！」

咲「お嬢様！こちらに！」

レミ「でかしたわね。咲夜。」

紫「難しいのね。ビンゴって。」

？少女遊戯中？

？少女遊戯中？

楓 「それでは最後です！

20！

霊 「一個も開かないじゃない！」

魔 「やったのぜ！一気に2箇所もビンゴになったのぜ！」

レミ 「私もビンゴになったわ！」

咲夜 「私はなりませんでした…」

レミ 「もう一回戦ね！」

楓 「待ってました！」

紫 「ビンゴなんてサイテー！」

釣瓶落し・感染蜘蛛絲～暗闇の風穴～（地霊殿編 IV）

傷が治り、地霊殿に向かう。

て！真上にあんのかよ！

俺空飛べねんだぞ！

（変換使えば飛べないこともないが）

階段だ！なんて心優しんだろう！

階段を登っていると、

でかい穴にぶち当たる。

「うわっ！」

「あれ？お兄様？」

フランは上に残されたまま俺は穴を転がり落ちる。

「うぎやつ！」

「こりや登るのは無理だな…」

横に続く道を歩く。

寒いな…さっきまであんなに暑かったのに…

しばらく歩いてみると、

あれ？向こうに灯りが…

近づいて見ると、大妖怪『土蜘蛛』を名乗る人物が現れた。

その頃フランは、

「お兄様、落ちちやった！」

「ひっひっひ」

「誰？」

フランの背後にいたのは緑色の髪。

と桶。

「私はキスメ！あんたは？」

「あつとえーと、フランだよ！」

「よろしくね！」

キスメ 妖怪 釣瓶落し。

上から落ちてきて、人間を連れ去る。

対して強くないけど、会ったら怖いやつだ。

「キスメちゃん！私のこと食べないの？」

「あなた妖怪でしょ。なら食べないわ。ねえ友達になつてくれる？」

キスメが答える。

「いいの？」

「ええもちろんあなたが、いいのなら！」

なら！

「よろしくね！」

「それで？フランちゃん？なんか困ってる？さつきからその穴見つめてまさかなんか落とした？」

キスメが逆さまになつて聞く。

「えーとねお兄様がね。落ちちやったの。」

「ふーんじゃあ呼びに行こー！」

キスメが持ちかける。

「お兄様救出大作戦だね！」

フランは羽を飛ばたかせ、キスメは頭を上直し、穴へと入っていった。

「あの一」

「あ？ああ私はヤマメ。」

眼の前には大妖怪土蜘蛛。

彼女の能力は病気を操る程度の能力。

そして何故か弾幕ごっこをすることになった。

「あなたなかなか強そうだからね。」

とか言っつて。

「武符『アルベレントフレア』！」

「phase2『魔撃』 Side ドラゴンセーブ！」

巨大な龍が現れ、炎を吐く。

「チッ」

「やるわね。こちらの番よ！畏符『キャプチャーウェブ』！」

狭い空間を弾幕が走る。

「phase3 ショット」

手の中にショットガンが現れる。

弾を込め、打つ。

「力を火力に変換。」

弾を形作る『力』を変換し、実体のあるギリギリの量を火力に変換する。

肉眼で見えなくなり、加速する弾丸は、キスメを狙う。

「蜘蛛『石窟の蜘蛛の巣』」

蜘蛛の巣が弾丸を止める。

再度弾を放つ。

「火力を攻撃力に変換！」

速度は落ちたが、糸を貫く。

「ちっ」

「phase5『悲劇』！」

無数の針がヤマメを貫く。

「なかなかやるわね。いつでも来なさい、歓迎するわ。他の人間は連れてこないでよ。それと…すぐに手を洗ってね。私はあなたを傷つけない。」

地霊殿と死体猫く死体旅行く（地霊殿編 V）

「おにいさん！ここは地獄やで？生きとる人間なんて、一瞬で死んじゃうぞ？」
微妙に関西弁！この猫なんだよ！

「ああ冥土の土産？に名乗ってやろう！火焰猫燐！」

は、はあ

「それじゃあ私の猫車に乗ってもらおうか？」

「……！」

「!?ただの人間じゃないみたいね？」

「フラン！」

猫が焰を巡らせフランを追う。

「禁忌『クランベリートラップ』！」

フランの弾幕が焰を消す。

霊たちが集まってきた。

「霊魂『転生天羅』！」

集まってきた霊魂が猫を襲う。

集まったのは怨霊。

俺の声に応じこちらへとやってきた。

燐は倒れてしまった。

ここが地霊殿。

く地霊殿エントランスく

「うげきやあおおー！」

雄叫びをあげて妖怪がこちらにやってくる。

「恋煩『マスターズパーク』！」

直線の光が妖怪を貫く。

その後も敵を蹴散らしながら先に進んだ。

「？」

しばらく歩いていると、いかにも宝箱！って感じの箱を見つけた。

魔理沙なら飛びつくんだろうな…

※博麗神社

「はあつくしよん！」

「あんた気をつけてよね…」

「わいい誰かに噂されたような気がしてな。」

※

そーいやヤマメは建設が得意らしい。

人間が住めるような家も作れる。

そろそろ幻想郷にも家がほしいな〜

まあ先の話か…

角に差しかかりなんとなく右に曲がる。

「うぎゃ！」

2つ声が重なる。

一つは俺、（フランは上げてない）

もう一つ

「あれ？萃香？」

「おう楓じゃないか！」

角でぶつかつたのは、地霊殿宴会のときに知り合つた鬼。伊吹萃香であつた。

「何してるんだ？」

「あんたこそ？こんな辺鄙なところで。」

「俺は覚に会いに、」

「わ…私は…その？金目のものを…」

萃香がこつち見んなというふうに見てくる。

「魔理沙みたいだな」

「あんなぐーたらと同じにするなあ！まあ言われてもしようがないけど…」

※博麗神社

「はあつくしよん！」

「もう！きをつけてよね！」

「わりいわりい！誰か悪口いったような気がしてな。」

※

「とりあえず行くわ。じゃあな萃香！」

「おうよー！」

で、ここが、

覚の部屋か。

果たして楓一項は古明地こいしと会えるのか！

衝撃の結末は次回！（個人の感想です。）

乞うご期待！（そんなめんどいことするとは言ってない）

なんと丸々3話の大長編！（なるわけねえだろ。vsさとり一本やぞ？）

そして地霊殿編の後も長期シリーズ作成決定！（勝手に決定すな。何だ。俺を病ませる気か？まじで失踪するぞそんなことしたら。恒例の単発出すに決まってるだろ。）

ついに楓に家が！（ああそれっぽいこと言いましたけど、次の大長編の後ですね。）

解説

『霊魂』『転生天羅』

楓のスペルカード。

霊を操る程度の能力を使ったスペル。

怨霊を集めて相手に遅いかける。

怨霊は精神こころを蝕む。

そして精神こころの最深部に入りこむと輪廻転生から外される。

恐ろしいスペルだ。

ただしこれは罪の重い人程かかりにくくなる。

ちなみにお燐の場合は、地獄で懲役数百年ほどで済んでいる。

さいこめとりー　　く少女さとりく　　(地霊殿編　　VI)

「ようこそ」

地　　霊　　殿へ

「あんたが古明地か：UFO：」

「UFO？なにそれ知らないんだけど？」

「霊夢が言ってた。」

「霊夢？ああ博麗の巫女のことね。」

大きな椅子にに腰を掛けていた少女は
くすんだ紫の髪を下げ、

薔薇の刺繍のはいった水色のワンピースを着ていた。

そして腕の内には紅い目玉。

「UFO?もしかしてこいしがまた?」

「あなたが、こいしでは?」

女が答える。

「私は古明地さとり。こいしは妹よ。」

「手合せしない?」

覚というかさとりが申し出てくる。

「いいぜ。」

「そちらのお嬢さんも二人でかかってきなさい!」

ルールは、スペルカード無制限。制限時間なし。先に戦闘不能にしたものが勝ち。

「模技『夢想封印』!」

札が飛び交う。

「巫女と同じ技…」

後ろに行つて回り込むか…

「…!?!」

気づかれないようにしたのになぜ…

気づかれたツ!

「脳符『ブレインフィンガープリント』」

弾幕が飛び交う。

「模技『夢想封印 防』」

札で守る。

「夢符『スリープスパーク』」

「心花『カメラシャイローズ』」

相殺…

完全に動きを読まれてる…

「動きはあまり読めないわ。あなた、なかなか予想外のことするじゃない?」

「…心を読んだ…」

「ええそう。私は心が読める。覚だからねえ?」

「今度はこちらからよ！想起『恐怖催眠術』」

「恐怖『無双不敵』」

弾幕を防ぐ。

このままじゃ埒が明かねえぞ…

「ここはフランに頼んで…援護に…」

フランSide

「わかったお兄様！」

お兄様は援護にまわってくれる。好き放題やるしかないね！

「いきなり行くよお！禁忌『禁じられた遊び』」

今、私の口角あがった。

やっぱり本能のままも気持ちいいね。

高密度の弾幕が飛ぶ。

「想起『テリブルスーヴニール』」

相殺…いや少し押した…

「くっ！」

「まだまだ！禁弾『スターボウブレイク』！」

「想起『二重黒死蝶』」

「想起『波と粒の境界』」

2枚切りね！

このくらい！こうよ！

今度は相殺。

「禁忌『恋の迷路』」

やばい！私の持ちスペカが尽きる…

「あなたたった10しなスペルカードを持ってないのね。そんなに強いのに。」

この覚とかいう妖怪うざっ！

「くっ！」

軽々と弾幕を避ける。

「武符『アルレベントフレアPhase3』砲撃』Side『ショット』」

お兄様の手には銃が握られている。

楓Side

このままじゃほんとにフランのスペカが切れるぞ…

俺のスペカも多いと言えば嘘になる量だ。

アルレベントフレアが切れればそれこそマスパと重力のやつしかないぞ…

…覚は日本の妖怪なら…外文文化に疎い幻想郷なら…

「フラン！ Wait 合 for を the 待 signal！」

「わかった！」

「何を言ってるのかしら？」

If 英 you 語 speak で in 話 English, セ Satori 覚 won't に get も c

「な！何を言っているのよ！」

「—Fran said, ” And will no one be gone? 」

Go. 《フランは『そして誰もいなくなるか？』を使え！》

「all right」

しばらく弾幕戦は続いた。

フランSide

「now! 今 go! だ！」

お兄様のあいず。

「秘弾『そして誰もいなくなるか?』」

「Phase 5 『悲劇』」

地霊殿の奇麗だが寂れた広間は翔び弾幕と弾幕が重なる。

うねりうねる炎。

死を呼び覚ます焰。

「まだまだね。」

「私はこのくらいで破れないわよ。」

…!

「驚いているようね。」

「でも、まだまだ決着は先のようなね。」

こめいじーさとりく3eye. く (地霊殿編 VII)

床は割れ罅^{ひび}が走る。

こうなったらこれを使うしか…ないか…

「これって何よ。」

「スペルカード！」

「手形『八坂。神の御威光』」

弾幕が流れるように飛ぶ。

そう神奈子のスペカだ。

俺が開けたのは小さな封筒。

普段は視覚に入らないよう封筒に入れることにしている。

なぜ視覚に入らないようにするか？

これには『視る』ことよって発動する、条件型魔法がかかっている。

そして封筒に入った手形を見ればそれに込められた能力（今回はスペカ）を使用でき

る。という代物だ。

そして霊を操る程度の能力を使用し神霊の手形を持つてきた。これを見ればその能力を行使することができる。

そしてこれはいわば神奈子の分神といったところだ。

弾幕が走る。

「急に弾幕の性質が変わった!？」

さとりも驚愕！

「防がなきゃ！想起『飛行虫ネスト』!!」

「手形『穰。秋の空と乙女の心』！」

「くっ！これしきの微温い弾幕！」

「恋煩『マスタースパーク』！」

光線が放たれる。

「あの魔法使いの攻撃!？」

「想起『戸隠山投げ』」

「足りない！これで！決める！」

「想起！『うろ覚えの金閣寺』」

超高密度の弾幕が四方八方から飛び交う。

「武器『偽慥劍』」

靈力が集まり劍を形作る。

さとりには斬りかかる。

「きやつ！」

勝った…

おまけ (いらん)

『博麗神社に饅頭が現れた話。』

「靈夢おはよ。」

俺が炬燵で温まる靈夢に話しかける。

「ああおはよ」

炬燵に入ってみる。

「寒いわね。 てかなんで入ってくるのよ…」

「嫌？」

「いや別に… あ誤解しないでね？」

UFO異変が起きてから少し立ち冬12月。

そうかここに來てから半年経ったのか…

(5月に來たぜ！)

「あんた、足冷たいわね。」

「そう？」

とぼけてみて霊夢の足にくつつけてみる。

「きゃっ！ あんた！」

うわ…霊夢マジギレかいな…待って殺意…殺意が…

ガタツ

玄関の方から物音が聞こえる。

「魔理沙かしら？でもでも魔理沙なら縁側から突っ込んで来そうだけどね。」
「たしかにな。」

そう言いながらお互いに視線を合わせる。

「霊夢がいけよ」

「なんでよ。寒いからあんたが行きなさいよ」

「なんでだよ」

じゃんけんで決めることになったけども、

負けた！

ということで玄関へ向かう。

そこにいたのは丸っこくて動く正直控えめに言つてキモい生物だった。

「妖怪?なのか?」

霊夢に聞いてみるか。

そして居間に戻りこたつの上に変な丸いやつを置く。

「霊夢、これが玄関にあつたん…居た?んだけでも」

「なにこれきも」

霊夢…

その丸っこいやつの形容はどことなく霊夢っぽかった。

黒髪に赤いリボンそして口調まで(喋った)霊夢そっくりだった。

でもね、霊夢と違ってキモい。

一体これが何なのかそれはまた別の話。

閉じた瞳・開いた心くハルトマンの妖怪少女く（地霊殿編

VIII

「こいしを探してるのね。」

「まあな」

弾幕ごっこが終わりさとりとも仲良くなつた。

「こいしなら多分妖怪の山の方に遊びに行つてると思うわ。」

「そうか。ありがとう」

「ここに来た意味…あるんだかないんだか。」

「まあたしかにねえ。」

…読まれたか。

「読んだわよ。」

「そかそか」

「じゃあな！」

「ばいばい！」

さとりは礼を言い妖怪の山へ向かった。

く核融合炉く

「あ！さっきの侵入者め！始末してくれ！」

鴉：そんなのもいたな。

「七星『セプテントリオン』」

エネルギー砲が放たれる。

「武符『アルレバントレーザー』!!」

相殺。

「手形『洩矢 坤操作』！」

核融合炉のパネルが剥がれ土が鴉を貫く。

「うぎやああああ！」

く守矢神社く

「お！楓じゃないか！」

「お！神奈子じゃん！」

見事に重なる。

「こないだはありがとな手形押してくれて。」

「お安い御用よ。」

神奈子ってなんだろう神格ということもあつてすごい強そう（てか強い）だけど、ど

こかかわいい！

神ってすごい！

「まああがつて行きな。客人がもい一人いるが…」

「ありがとな。」

「で、君が古明地こいし…？」

「うん…」

澄んだ緑色の髪

さとりと同じ青い目玉。

うん。かわいい。

「えーとUFO事件の犯人？」

「うん。お盆投げてあそんでたらなんか大騒ぎになっちゃった。」（そんな大きな騒ぎに

はなつてないぞ？）

「私、誰にも気づいてもらえない…」

少女が泣きながら声を吐く。

「そうか？今は少なくとも4人の人（まあ主に吸血鬼と神だが）に認識されている。」

ナイスフォロー（うざ）

「あなたは嫌いにならない？」

「お兄様すんごく優しいから安心して！」

フランがなんか言い出す。（楓、おい）

「ああ俺が自分から離れたりなんかしないさ。」

「ありがとう…えーと…お兄…様？」

お兄様…かあ名前言うの忘れた…

「俺は楓。」

「か え で？」

何なのかわかってないな。

「俺の名前。徒花楓。」

ちゃんと名乗っとく。

「お兄様！」

結局お兄様なんかい！

そしてこいしは何故かフランと仲良くなった。
何故か。

えーと帰り道、文がつきまとして来たのでぴちゅーん。

チルノが絡んできたので

「お前はもう少しフランを見習え。」

「なんで？」

少しからかったろ

「チルノお前も俺のことを『お兄様』と呼びなさい！」

「なんで？」

なんでしか言わんなこいつ。

「あたい最強だから。」

急にどうした。

「お前はあたいの部下だ！」

なんでそうなる。

「だからお前がお姉様と呼びなさい！」

なんでだよ

「なんで？」

言い返したろ。

「部下め！口答えするな！」

お前…

「じゃあ正直に言うわ『嫌だ』」

「（衝撃）」

…

そんなことがあつて神社に戻ってきました。

家ほしいな。

リグル大陸・ムシフェッショナル～仕事の流儀～

「ひゃっ！」

玄関の方から霊夢の悲鳴が聞こえる。

「どうした？」

「むっむし！」

虫か。

「霊符『無s』」

おいおい！

虫相手に夢想封印すか！

霊夢は大の虫嫌いだ。

ということでごんなことするのはあやつしかいない！

と霊夢に言われいざ妖怪退治へ！

く妖怪の森く

「ひゃー！」

「やめてー！」

子供の声がある。

子どもたちが一人の子を虫取り網でひっぱたいている。

「おいやめてやれよ。」

「へーい」

何だその変な返事は。

お前から大体小学校の高学年くらいだろ？

もうちよいちゃんとしろや。

「大丈夫かい？」

「うん。お兄さんありがとう。助かったよ。」

ホタルの妖怪。

「リグル・ナイトバグ…」

「へえーお兄さん僕の名前知ってるんだ。」

どうしようこの状況で退治するなんてできない！

たがどうにかしないと霊夢に…

「君の能力『蟲を操る程度の能力』だよね？」

「そうだけど？」

よしてきた！

「神社にゴクじゃなくて虫が出て巫女が大騒ぎでね。」

「ふむふむ」

「君の力で別のところに行くようにしてくれないかな？」

さあ受けてくれ。頼む！

「いいですよ。その代わり報酬はもらいますよ。」

何この子背丈はチルノぐらい（というかそれより低い）なのにめっちゃしゃつかりしてる！

「いいぞ。」

とりあえず前払いで

「ほら飴だ。ちゃんとした代金は後ほど払うから。」

「わかりました！600円でおねがいします！」

「あいよ」

賽銭箱からくすねとこ。（どこぞの魔法使いみたい）

はてはてリグルだが虫の知らせサービスとやらで一儲けしているらしい。（単価が低

いため大儲けというわけではない。だが幼女にしちやあ高い小遣いだな。」

尺は持ちそうだけど、一応ね。

番外編『リグルの虫の知らせサービス 上』

レミリア（以下、レ）「嫌な予感がするわね。」

咲夜（以下、咲）「そうですかね？能力で分からないんですか？」

レ「能力のおかげで予感がするの、それ以上求めれないわ」

咲「そういうものなんですかねえ？」

レ「一体何が起こるのかしら？」

美鈴（以下、美）「あゝ表にこれが…」

咲「門番の仕事は？」

美「それは置いといて…」

咲「…」

『虫の知らせサービス』

レ「何よこれ？」

美「なんか、これから起こる嫌な予感？ていうのを当ててくれるそうです。」

レ「よくわからないけど、今の私達に必要そうね。」

咲「香霖堂に行けば良さそうね。早速行ってまいります。」

く香霖堂く

咲「ごめんください！」

霖之助（以下、香）「お、咲夜ちゃんじゃないか。」

咲「はい。虫の知らせサービスというのを聞いて、」

リグル（以下、リ）「それ、僕に任せてください！」

く紅魔館く

咲「連れて参りました。」

リ「えーと、お客様のおっしゃる嫌な予感…それは…」

花より団子。

「あゝ冥界と違ってこちらは暑いですね…」

幻想郷の人里を歩く。

私、魂魄妖夢は主人の使いを頼まれている。

「あら妖夢ちゃんじゃない。団子ね。はーい。1つおまけね。」

団子やおばちゃん笑顔で団子を差し出す。

主人。すなわち西行寺幽々子からのお使いというのは、団子の購入である。

「幽々子様この団子は美味しいっていつも言ってるんですよ。」

「そうかい。そうかい。幽々子さんみたいな美食家（大食らい）に言ってもらえるなんて嬉しいわね。」

冬も終わり春を迎えた頃だった。

「きゃっ！」

半人が襲われた。

半霊が駆け寄る。

妖怪だ。

「大丈夫かい？お嬢さん！」

紅葉のような茶色い髪。

博麗の巫女と同じ装束を着ていた。

「武器『偽慥剣』」

妖怪は切り裂かれいつものように消える。

「大丈夫？」

「はっはい！」

楓Side

なんか知らんが白玉楼とかいう場所に招かれるらしい！

ようわからんけど！

……彼処が冥界？

「はいそうですけど?」

遥か空高く黒い裂け目。

あそこなん?

なあ軽々と飛んでるけどさ、飛べんよ。普通。

「手形『八坂神』」

これで一定時間飛べはするが…

く白玉楼前 階段く

これ登るん?

死ぬよ?

普通に。

「…持久力に変換!」

く白玉楼く

きつつうく

この階段きつつうく。

大事なことから2回言いました。

「あなたが、徒花楓ね。」

桜色の髪をした女性が話しかける。

「そうですけども」

「私はこの白玉楼の主であり、冥界を指揮する者。」

「西行寺幽々子よ」

なんかつおそう。

ということにはわかった。

「さあお団子でも食べましょう?」

「あ、はい!」

「いただきます」

緊張するう

もぐっ

うむ美味しい。

もっちりとした食感うん美味しいな。

隣に座る幽々子を見る。

両手に持ってもぐもぐと食べている。

もう一つ食べる。

うんやはり美味しいな。

隣を見る。

あれ両手いっぱい持って、一気に食べた!?

幽々子は大食いであつた。

だがなんだろうかかわいい!

なぜだ! 幻想郷のやつはこんなにかわいいんだ!

幻想郷恐るべし:

庭に咲いていたきれいな桜だが団子の話のみで全く触れられなかつた。

幽々子も妖夢も可愛すぎる。

く白玉楼 道場く

妖夢と手合わせすることになった。

妖夢は自前の刀で（楼観劍という名前だそう。）

俺は普通の真劍を貸してもらった。

「お願いします！」

その言葉と同時に劍が交わる。

ルールは、スペルカード禁止。

特殊な能力の禁止。

完全な身体能力と、技術のみでの勝負だ。

壁を蹴り妖夢に斬りかかる。

「なかなか強いですが、もっと裏をかいてきてください！」

「おうよー！」

変換して俺のスペック自体は妖怪並だが、さすが劍術特化はすげえ。

まあ負けてはないけど、

再び劍が交わる。

力量で負ける。

「くそっ！」

「もう少し鍛えたほうがいいのでは？」

再び斬りかかる。

でもここで刀を投げて俺はスライディングする。

「!?」

妖夢の、体制が崩れる。

そのまま刀を手に取りぐるつと一回転。

床を蹴り梁を握る。

そのまま妖夢の、首を捉える。

「勝ちだな。」

「負けてしまいました。でも次は負けませんからね！」

「おうよ」

もう一回試合したが負けた！

チルノを改造した話。

ある日チルノがこう言ってきた。

「あたいね！最強でしょ！」

「おう…そうだな…」

多分違うと思う。

「でもね、あたいより強い超最強が現れたんだよ！」

「へえ〜」

「何だその関心のなさは！」

関心って言葉知ってるんだ…

「でっかい羽が生えてて！右におみくじ引くやつをねくっつけてるの。」

あああの鴉か…

(主 (詳しくは18話をチエック！)

たしか霊鳥路とか言っただけ？

ということ！チルノをプロデュース！

まずは！基本装備を整えよう！

方に槍とかつけてみて：

手には軍手つけて！

なんか拾ったお面をつけさせてみたりとか！

後は？

攻撃が緩和されるように服の中に板を挟む！

これより絶壁だね！（は？

怒られませんように！

「あんたまた変なことしてるでしょ？」

霊夢がめつちや嫌そうな顔してる。

俺ってそんなにヤバいやつなん？

いやあれは事故だ。今は関係ない！

（主（詳しくは限定の方でいつか出すかもしれないので要チェック！

そして頭に軽機関銃！

これで最強だね！

無縁塚に埋まってた！（世界一怖い墓。）

というわけで

く妖怪の山 地下核融合炉く

「行くぞお！」

とチルノ。

「侵入者はつけらん！」

「地熱『核ブレイズゲイザー』」

「凍符『パーフェクトフリーズ』！」

いきなりかよ！

正面衝突！

お！どんどん弾幕が溶けてく！

さすが軽機関銃だね！

「焰星『十凶星』」

ウオー高火力！

「凍符『フリーズアトモスフェア』！」

おー！

やはりややお空が押されてるな！
さすが軽機関銃だね！

まあというわけで結局のところ軽機関銃により両者の弾幕が一掃されお空が一方的に倒されるという結果になった。

お空につけたらチルノがアウトですな！

さすが軽機関銃だね！

(軽機関銃最強説あるぞ。)

2本立て率高くないか？

『霊夢に膝枕してもらった話』

変な意味はないよ？

うん

冬の博麗神社

「うわ〜寒。」

霊夢はいつもどおり炬燵でぬくぬくしていた。

博麗神社の炬燵は炭を燃やしてその熱で稼働している。

（今回出番の多い主（香霖堂のは電気で動くぞ！

その頃楓は。

「うーわ寒。」

霊夢に頼まれ蜜柑を買うはめになった。

「寒い」

「霊力を熱力に変換。」

やや温かい。

それにしても寒すぎてあんま変わらなすぎるんやけど！

巫女服だと余計寒いな…

俺の普段着は基本巫女服だ。

紅霧異変後はほとんどこの格好だ。

霊夢のものより、色々ついてて動きにくいけどこっちのほうが温かいような気がする。

でも、これも肩開いてるんだよなあ。

それで寒いな。

博麗神社。

「寒〜」

炬燵に入る。

「あつたけえ。」

しばらくするとととんとん熱が消えてくる。

「あれ？」

霊夢が炬燵のなかを除く。

「炭が切れたわね。」

まじかよ。この状況で炭が切れるのはやばいぞ。

「寒いな。」

「そうね。」

「そうだ、ちよつとこつち来なさい。」

霊夢が手招きする。

「なんで？寒いんだけど」

「いいから来なさい！」

はっはい！

炬燵から一度足を出して霊夢の隣で再び突つ込む。

「ほら？開いてるわよ？」

霊夢が俺を見て自分の膝に目配せする。

「何よ？女の子の膝枕よ？感謝しなさい。」

霊夢はそういうところがなあ恩着せがましいというか？

でも可愛いから許す！

「ほら早く。」

「は、は〜い！」

霊夢の膝に頭を乗せる。

霊夢が俺の頭を撫でる。

なんだか落ち着くな。

「おやすみ…：霊夢…：」

「おやすみ。」

「つて重いじゃないの！

まあ今日ぐらいいいか。」

妖精大戦争編 I 『大戦争 小異変』 ・ 『光の屈折』

「そろそろ季節じゃない？」

「なにがよ？」

3人？3匹？の妖精が会話している。

「何がって異変よ！異変！」

オレンジ色の髪の毛の妖精がうるさすぎる声で言い出す。

「いへん？」

黒髪ロングの妖精が問う。

「私達っていつも異変の中心にはなれないじゃない？」

「まあそれはそうね。」

白色の妖精がうなづく。

「だから私達妖精で戦争を起こすのよ！それで！」

一同がオレンジ色の髪の毛の妖精を見つめる。

「博麗の巫女をぎゃふんと言わせるのよ！」

「それいいわね。」

と黒髪

「でもそう言って去年もだめだったじゃない。」

「…まあ…そうだけど…」

沈黙が流れる。

(でも今年こそは！)

というわけで！

妖精たちは

チルノとかいう氷精のところにやってきました。

「ここがチルノの家ね。」

「な…なんだろう虚しくなってくる…」

チルノの家は土でできていた。

「私達でも気にすんでるのよね。」

そして妖精たちはその土の家を崩した。

「よし！これでオツケー！」

オレンジ色の髪。が言う。

土の山には旗が立っている。

『光の三月精 参上！』

そしてうきうきな気分で魔法の森へと帰っていった。

やっぱり多い2本立て。

『光の屈折』

「ふふっ」

「ぐひひ」

妖精たちが笑っている。

彼女たちの名前は『光の三月精』

オレンジ髪陽気なサニーミルク

王道系女子（何だそれは）スターサファイア

そしてルナチャイルド。（私だけなんにも紹介なし!?)

彼女たちの本業それは、

悪戯

である。

そして今日もまた犠牲者が出た。

普通の魔法使い霧雨魔理沙である。

「今日も随分と晴れたな〜！」

魔理沙の家である魔法店の窓を開け紫の朝靄に包まれた魔法の森を眺める。

どこが晴れているのだ…

「梅雨も近づいてきたし、そろそろ神社に行きますか…」

魔法の森は、梅雨の時期物凄くジメジメする。

これを好きになやつはほとんどいないであろう。

魔理沙もジメジメは嫌いである。

「今年は早く暑くなりそうだからと顔出すぐらいになるかもな…」

そして魔法の森を抜ける道中で妖精たちの悪戯が起こった。

「あれ？迷っちゃったのぜ！」

（仕方ないし飛ぶか…）

魔法の森は飛行に適していない。

でも魔理沙はある秘密のルートを知っていた。

地下にほってあるトンネルである。

ここはそれなりに広く箒で飛ぶこともできる。

このトンネルを知っているのは魔理沙だけ……らしい。

しかし

アリスは知っている。

妖精達も知っている。

幽香も知っている。

ルーミアも知っている。

楓も山の妖怪も知っている。

地底の妖怪ももちろんのように知っている。

霊夢は知らない。

魔理沙はみんなが知っていることを知らない。

そして魔理沙は穴の中で迷った。

妖精の力ではなく普通に迷ったのである。

そして春がやってきた。

サニー達三月精はあまりの寒さに春まで引きこもっていた。氷の矢は春になると溶けて風のまま飛んでいった。

それは博麗神社へとたどり着き、河童が殲滅されたらしい。

これは後に花見にて酒の摘みとして語られた莫迦話である。チルノは宣戦布告のことを覚えていなかった。

2 本立て率の高さ

紅魔館へやってきた話。？1話？

紅魔館へやってきた。

理由は…ない。

なんともなく来た。

門番が寝ている。

ほんとにこのセキユリテイ大丈夫か？

「おーい！めいりーん！」

「はひー！なんでしゅか！」

かわいい

美鈴ばちくそかわいいやんけ

「前言ってたやつ。やる？」

「わかりまひた！」

まだ寝ぼけているようだ。

「でも本気でやりますよ」

起きた。殺気怖い。

「虹符『彩虹の風鈴』」

虹色の弾幕が動く。

「武器『無慈悲なお祓い棒』」

霊力がかたどられたお祓い棒で弾幕をかき消す。

でも本家には勝てないな…

「霊力を武力に変換！」

変換能力の戦闘においては最強格の変換先である武力ならどうだ。

こいつは攻撃力から体力防御力など戦闘に必要な力に自動的に割り振りされる。

これ一つ言うだけでいいから便利。

そして鬼級の力でねじ伏せたのであった。

くフランの部屋く

なんか知らんが、フランと咲夜としりとりをすることに！

「えーと主でございまする。ここからは誰が言ったかよくわかんないので一応名前を入れてあります。」

楓 「えーと俺が最初か。 えーと、りんご！」

咲夜（以下、咲） 「では、ごま」

ごまか渋いな。

フラン（以下、フ） 「えーとね。 まる！」

かわいい

楓「じゃあルーミア！」

咲「雨！」

いいつすね雨

フ「目玉！」

さすがフランちゃん

楓「抹殺」

咲「怖いですよ… えーとじゃあツナで。」

フランちゃんのは怖くないらしい。

フ「納豆！」

好きだもんな姉妹揃って。

楓「牛！」

咲「し…し…鹿？」

咲夜ちゃんかわいい。

フ「か！か！うーん…」

迷ってるかわいい！

フ「傘！」

楓 「…さ…あ! 咲夜ちゃん!」

咲 「…」

あれ咲夜めつちや顔赤くなってる。

咲 「…ん…ちゃん…だなんて…」

フ 「お兄様『ん』ついたあ!」

咲夜めつちやペしペし叩いてくる…

からかつてみよう!

「咲夜ちゃん!」

咲 「(プシユ〜)」

煙あがってるよ!?

待ってかわいい。

楓 「待ってかわいい…」

咲 「かわいい…だなんて…」

またもペしペし!

待って可愛すぎるんやけど…

小悪魔 「あの! 楓様!」

小さな女の子がふらんの部屋の戸を開けて手を招く。

楓「あっこあちゃん！」

この子は小悪魔。パチュリーの使用魔？的なやつらしい。

小悪魔「レミリアお嬢様がお呼びです！」

楓「お…：そういえば…：そろそろ夜明けじゃん！挨拶しとかないとね…！」

楓「ありがとなこあちゃん」

楓「それじゃあ行ってくる。」

咲「はっはい…！」

まだ照れてる。かわい

フ「咲夜今度はあっちむいてホイしよお〜」

咲「はい！」

そんなこんなでレミリアのところに行くのであった。

第3章 無職と人里防衛

レミリアと寝た話

咲夜かわいかったな。

よし今度から咲夜ちゃんとよぼう。

そんなこんなでレミリアの部屋へとやって来ました。

「入りなさい。」

「はい」

レミリアはベットの上に置かれた棺？の中に座っていた。

いつもよりゆるっとした服だ。

(いつもの寝間着じゃなかったらしい)

「ほらこつちに来なさい?」

はへ?

「ほら?こつちに来なさい。」

次の瞬間腹をどつかれる。

「ぶがつ」

目が覚めたら狭い空間にいた。
暗っ！

「ふうっ」

レミリアの声。

いつもより大人びてる。

これがカリスマと言うやつなのか？（知らんけど）

そう俺はレミリアと、あんまり大きくない棺の中に入っていたのだ！

棺の端っこへと端っこへとよる。

レミリアがすりすり近づいてくる。

「ひゃっ」

「かわいい声を出すわね。」

（ごくり）。

レミリアが俺の腕を腰に回し

自分の腕を俺の腰に当てる。

俺を引っ張る。

暗いからよくわからんが今第三者が見れば抱き合っているということになるのでは

∴

まあいいか（いいんかい）

レミリアがさらにすり寄る。

ぎゅっ！

強く抱きしめられる。

やばい息できん！

ただでさえ空気の薄い棺の中で思いつき抱きしめられたら（鬼の高火力で）

まじで息ができない。

「こけえ！」

外で鳥が鳴く。

朝が来たようだ。

でもその朝日は少しも入ってこなかった。

「さあ今日はずっと一緒よ。」

はひい

思わず変な声が出そうになる。

レミリアかわいい（おい）

レミリアどんな顔してるんだろう。

「レミリア？」

レミリアはもう寝ていた。

その手で俺をがっしりと抱いたまま。

棺の中の半分がから空きになりもう半分に俺とレミリアが収まっている。

つまりめつちやくつついてるといいうわけだ。

そして俺も寝ついた。

「えで…かえで…かえで？起きてる？」

その声で目を開いた。しばらく棺の中にいたからかうつすらと周りが見える。

眼の前にレミリアの顔。

温かい息が顔に当たる。

うつすらと目に映るレミリアの顔は紅き吸血鬼という二つ名を彷彿のさせる真紅に

染まっていた。

そしてレミリアが言った。

「ねえ…そろそろ夜よ。」

「そう…だな…」

「そろそろ眠気も覚めたわ」

「おう」

「最後に　　キスしてくれる？」

そして不運なのか幸運なのか、俺はそこで人生初のキスをしたのだった。

お暇するときレミリアは見送ってくれなかった。

咲夜ちゃんとパチュリー、小悪魔、そしてフラン。

陽気（陽気すぎる）で温かい見送りだったが、何故か少し胸が冷たかった。

そして霊夢が一晩中楓が帰らなくて物凄く腹を立てていた。
なぜだろうか？（知るか）

チルノのパーフェクトケーキ教室

花見でなんか出せと霊夢に言われた。

せっかくだし外界のお菓子でも振る舞うかあということ
でちび共とケーキを作ることにした。

メンバーはチルノ、リグル、大妖精、フラン、こいしの5人。
と俺。

博麗神社の厨房では無理だなというわけで紅魔館のキッチンを借りることになっ
ている。

えーとホットケーキミックスなんて便利なものはなかった

幻想郷は大変だな！

ということで小麦粉なんても的是ないから、米粉を。作るところからです
不便だな幻想郷！

えーと米を臼に入れて、

「よし！ここはフランかな？頼んだぞ！」

「はい！お兄様！」

その他がまじまじと見つめる中、フランが石臼を回した。

ゴキゴキゴキゴキ

しばらくごりごりしていると白い粉が出てきた。

小麦なんてものはないので米粉で代用する。

続いて砂糖！

これまた幻想郷の貴重品！

こちらもフランに頼んでその間にこの篩で米粉をさらに細かくするぞ！

花見だから結構来ることを予想して四人がかりで米粉をさらに細くする。

「あたいのほうがかきれいにできた！」

「…」

チルノの周りは粉まみれである。

その場に沈黙が走る。

次に卵と（鶏の神様？みたいなのがいて霊夢にとつて来てもらった。）

牛乳（それもまた専門の妖怪がいるらしく霊夢にかつさらってもらってきた。）を

ボウルに入れて、よくかき混ぜる！

そして篩にかけた砂糖を混ぜて米粉も入れる、そして混ぜまくる！

ひたすらに混ぜる！

手元はリグルに照らしてもらっている。

流石ホタルだね！

「あのーもしかして今日このために呼ばれたんですか？」

「いや他にもあれとかこれとか？」

そしてそれを型に流し込んで、咲夜ちゃんとの連携プレイで間欠泉へ持って行く！

そう間欠泉から出る遠赤外線でじっくり焼くのだ。

ちなみに核物質が入ることもあるけど、そこは、まあ大丈夫でしょ。（品質保証）

そして数時間後、そろそろかな？

表面に軽く焦げ目をつけて、ホイップクリームを塗る！（こいしとチルノで作ってもらった。）

いちごをのつけて出来上がり！

それを十回やって！

はい！完成です…

いやー疲れましたね！

いくつかチョコ味にしてみた。(無縁塚にカカオ豆があつたときはびっくりした。)

レミリアに試食してもらつた

あもちろん子供たちにもね(俺より永く生きてるが)

「うん美味しいわね」

「美味しい!流石あたいだね!」

「そうだな。チルノもみんなもよく頑張つたな!」

みんなにつこりしながらケーキをほおぼる!

かわいい。すぎるやろ

じゃ、

俺もいただきま〜す!

河童と外来技術。(河童の技術はせかいいちい！)

時間は遡り妖怪の山異変の少しあと、楓は妖怪の山の中腹にある玄武の沢を訪れていた。

「お！盟友！」

「お！にとり！」

河童にとり、河童。

「で？盟友！何か持ってきてくれたか？」

「えーとなこれだ！」

そっくり大きめの革袋の中から、いくつかの電子機器を取り出す。

まずカメラだ。

「これは？天狗が持つてるやつだね！」

「そう！」

続いてスマホ！

「これは！ 何だ？かまぼこ板か？」

「違う違う。スマホという道具で遠くの人と連絡ができたり、写真を撮れたり、いろいろ

なことがでるんだ」

「こんな薄いのにすぐいんだな！」

めっちゃ食いついてくる。

目キラキラしてんじやん。

「これかしてくれないか？」

「いいけど？」

「やった！やった！」

子供のようにはしゃいでる。

そして河童のアジト？へと案内された。

案内されたのは俺が二人目らしい。

ちなみに霊夢はゴリ押しで入ったことがある。

(案内じゃないだろ)

で水に潜るの？

いや河童だからと水中かなとは思ったが、

「心配するな盟友！空気はあるから！」

と言っていたのだが…

「ああそのことだがアジトまでのみちは水中なんだ。」

とんだ詐欺である。

「めいゆーおよげないのかー？」

「お。泳げるし！」

「ならついできて！」

どうしたものか…

カナツチの俺がどう泳ぎのプロの河童についていく…

こんな時の変換だな！

乾いた唇を開く。

「靈力を泳力に変換！」

水に飛び込む。

圧力えぐくね？

かなり浅いのに圧力がエグい。

おいこれ変換して体力上げてなかったらしぬぞマジで。
そんなこと言いながらにとりを追う。

く玄武の沢 河童のアジトく

「盟友！ここが我々のアジトだ！」

そんな大声で言っていていいのか？

だがそこは壮絶の世界であった。

ものすごいでかいやん。この街。

天狗の集落並みやぞ！

「驚いているようだね！我々河童は山の大妖怪の一種なのだよ！」

天狗と並んで。

「めいゆー！これを見てくれ！」

「なんこれ？」

「あれだよあれ！電卓？とか言うんだろ？」

そこにあつたのは板に沢山のボタンのくつついたようわからんものだった。

まあ電卓に見えんこともないが：

「見様見真似で作ってみたんだ！」

電卓？を手渡され、スイッチを入れる。

「使い心地はどうだい？」

まず1を押す。

次にプラスを押す。

そして今度は2を押す。

なんで6になるの？

とんだ不良品だな。

「どうだい？河童の技術は！」

どうしよう言えない！

なんて言えばいいんだ！

「えーとね、これは、いわゆる計算機なんだ……」

「そろばんみたいなのやつということだね！」

「そう……でもねこの電卓、計算ができてないね。」

電卓は算数が苦手。

魔理沙を手当した話。

「今日はきのこ狩りに行くのぜー」

魔法の森の中にひっそりと構える魔法店の前で叫んでいるのは

魔法使い霧雨魔理沙である。

魔法の森にはキノコがばかみたいに、生えている。

彼女の主食はきのこだ。

朝日が届かない早朝のことだった。

「それにしてもくらいのぜ…」

魔理沙はきのこを集めていた。

あつちにいったりこつちにいったり。

夢中になって採集していると、

ずて！

小さな石に足を取られころんでしまった。

「…」

膝からは血が流れ目からは涙が溢れる。

「ぐす…ぐす…」

楓Side

「一度叩かないといけないようだな！」

三月精にしてやられたぜ！

まさか歩いてたら膝カックンしてくるとはな！

さすが妖精！やる事が小学生よりもしょぼい！

そして俺は妖精たちの住処に向かった。

「ぐす…ぐす…」

泣き声？

魔法の森を通り抜けるとき誰かが泣く声があった。

「誰かいるのか？」

「……！」

がさっ！

葉が揺れる音とともに誰かがこちらに向かってきた。

一瞬妖怪かと思ったが自分の尻を見てわかった。

そこには俺の尻に顔を潜り込ませた魔理沙だった。

「なにしてんの？」

しばらく衝撃で動けなかった。

今あれ足が馬で上半身人間のやつみたいになってるんじゃないか？（名前忘れた）

「楓……会いたかったのぜ……」

なにこれめっちゃかわいい声。

魔理沙……お前そんな声出せたのか……

巫女服に涙が染み込む。

「運んでほしいのぜ……」

膝には赤い血。

ころんだのか……

「わかった。」

そう言っつてしゃがんで、魔理沙の腕を首に回す。
そしておんぶする。

「…」

両者が黙りこくる。

（霧雨魔法店）

魔理沙を長椅子に座らせ、消毒液（魔理沙おてせい）をつける。

「しっしみる！」

かわいい。（俺最近めっちゃかわいいって言うな…）

上から絆創膏（魔理沙おてせい）を貼る。

俺も魔理沙の隣に座る。

「疲れちゃったのぜ」

「なんか…怖い…」

怪我しただけだが…

「手 出して…」

かわいい待ってかわいい。

めっちゃかわいい。

そして昼ごろまで隣に座っていた。

何も喋らず、二人とも少しだけそっぽ向いて。

博麗神社に帰ってきた。

今ではすっかり馴染んだ巫女服は魔理沙の血と涙と

妖精の返り血で塗れていた。

「あんた遅かつ　派手にやったのね…」

あの博麗の巫女も黙るそのお仕置きは、果たしてどんなものだったのだろうか。

そして。

「あんた、その服湿ってるけど…」

霊夢が俺の尻を見て言う。

「まさかも r　とかじゃないでしょうね?」

すんごい怒ってる。

絶対YESといえば死ぬ。

NOといえれば絶対YESと言うまで聞き続けられる…

どうしたものか…

無職遊戯くゲーム機は蓬萊山輝夜を樂くするく

咲夜ちゃんと手合わせすることになったぜ！

「容赦はしません。」

怖い。

「メイド秘技『操りドール』」

ナイフが俺を囲む。

それで永遠亭に来たわけ。

「まあ対して怪我はしてないわね」

「ありがと永琳。」

「ええ」

その時壁のむこうからひよこつと顔が現れる。

「…」

「ああ輝夜出てきたの？」

「…うん」

「…暇だわ 永琳…遊んで。」

少女が出てきて言う。

体こそ子供だが言葉は大人びている。

「あーそうだ、私は鈴仙とお薬売ってくるからこの人と遊ぶといいわ」

永琳が手をぱちりと合わせ言う。

逃げたな。

永琳、逃げたな。

「あ、貴方…？だあれ。」

「楓だ。 えーと、輝夜ちゃん？」

「う…うん」

「なんか面白いものない？」

輝夜が聞く。

輝夜はいわゆるかぐや姫らしい。

そして蓬莱人とかいう不老不死の一種らしい！

「えーと、これとか？」

麻袋の中からゲーム機を取り出す。

無縁塚で拾ったものだ。3DSである。

「外の世界の玩具で、使えるかわかんないけど。」

「楽しそうね。　どうやってやるの?」

そう言いながら3DSを手に取りいろいろな角度から見る。

「えーとな、」

電源ボタンを押すと、起動の画面が映った。

「おっマ○オ入ってんじゃん。」

マ○オの顔にカーソルを合わせ決定する。

「できそうだな。やってみて。」

画面上に赤い帽子の人が映りステージが表示される。

輝夜がレバーを倒す。

マ○オが右に動く。

「なにこれ面白い!」

さつきまで横棒だった口がにつこりと曲がる。

この笑顔守りたい。

うんかわいい。

そして目の前にどこぞの茶色いやつが現れる。

輝夜がそのまま進んで茶色いやつに触れると途端に赤い帽子の人は倒れスタート位置に戻った。

「なにこれ！こんな変なやつに触れただけで死ぬと雑魚すぎるじゃん！人間でももう少し……」

マ〇オは弱いね！

そして何度も亀やらなんやらにあたって発狂しながらもゴールへとたどり着いた。

「やった！」

かわいい子供みたい、

二人で手を合わせて飛び跳ねる。

ガラガラ

戸の開く音、

足音が近づき俺たちがいる和室の障子に影が映る。

「姫様！ただいまです！」

「あ！鈴仙！」

鈴仙と呼ばれ出てきたのはうさみみブレザーという女の人だった。

「ねえ鈴仙！これすごいものよ！この子がやらせてくれて！」

「あお邪魔してます！」

とつさにご挨拶。

「あこちらこそご丁寧に！　でそのカスタネットみたいなのがどうされたんですか

？」

「えーとね。ゲーム、とか言う玩具でね。ここがこうなのがこうこうですんごい面

白いのよ！」

「ほうほう　よくわかりません！」

「ねえ楓！この子にやらせてあげてもいい？」

「いいよ。」

そう言つてうさみみに渡す

「ふむふむなかなか面白いですね！」

めつちや食いついてる。

「これが外の世界の技術ですか！月の技術よりも遅れてますが、こちらのほうが面白い！」

遅れてて悪かったね…

そんなこんなでその後も無縁塚や神社周辺で見つけたら渡してたりする。(3DSとかめつちや出る。Switchはなかなか出ない)

死神の 乗れぬ賃金 渡し船 泳いで渡ろう 三途川

博麗神社に手紙が届いた。

えーと、誰からだ？

「あんたーそれ…」

霊夢が口をあんぐり開けてこちらに近づく。

真っ黒な封筒。

確かになんか怪しいけども

「閻魔からの手紙よ」

まあじすかあ！

閻魔様が出てくるのか！幻想郷！

「とにかく早く行きなさい。怖い目に合うわよ」

…ひい！

怖い！

く三途の川く

三途の川に来てしまった。

俺は死んでない！きつとだ！

「やあ！つてあんた生きてるじゃないか。」

目の前には赤髪の女。

でかい鎌持ってる。

「…なんか悪いか…」

「生きてるやつは高くつくよ。」

ニタニタしてる。

「おいくら？」

「うーんざつと百億ぐらい？」

たっかいね！

「百億か…やめとくぜ！」

「なら生かせれないわね。」

まあじすか

「ちなみに死んでたらどうなるんだ？」

「全財産で手を打とう。」

まあじすか

「なら、泳ぐか。」

「え。。。」

船渡しがきよとんしてる。

腕を捲くつて川に飛び込む。

「あー川に入つては死んで…」

俺の能力、『霊を操る程度の能力』この最強の使用方法。

それは命を手放す瞬間に一瞬だけ靈魂になることだ。

これにより俺はノーダメージで死を回避できる。

そして気付いたこと、俺が主を置いている肉体は幽体離脱している間のみ損傷しないことだ。

つまり前述の死の回避をして体に戻ったらばらばらに砕けている。なんてことにはならない。

相手の攻撃を読めさえすれば完全防御できるわけだ。

そして幽体離脱のリスク。

離脱の速度を早めれば早めるほど、ものすごい痛みに襲われる。

早くすれば秒にも満たぬ速さで行うことができるが、悶えてそれどころじゃなくな

る。

もちろん体に戻ってもしばらくは消えない。

移動速度や、ものに触れるようになるなどすると、肉体に戻った際、激痛に襲われる。

といった感じで准不死身になれるのだ。

遠泳…

そういやあ泳力とかそのまんまだわ。

通りですいすい行くわけか。

いや逝くが正しいのか？

そんなこんなで陸に上がった。

く彼岸く

めつちや霊いる！

ここでも敵はいないな！

俺はこの能力により操れるが、極力その霊の意思を尊重している為、霊からの定評がある。(あつてたまるか)

そして閻魔の前へとやってきた。

「私は閻魔、ヤマザナドゥ。」

「…ゴクリ。 つて宴会のときの…」

沈黙。

閻魔の顔が真つ赤になる。

やばい変なこと言ったか…

「はつ恥ずかしくなんか…ななないですからね！」

…？

ああタピオカか。

「まあそれはおいておいて、貴方は罪を積みすぎです。」

何？めっちゃ強調してる。ああ駄洒落か。

閻魔って…一体？

「それで？例えば。どんな罪？」

「えーとですね。貴方は霊を操る程度の能力。を持つているようですが、乱用すればと
いうか今の時点で地獄行きは決定です。」

「それに貴方は人間なのに、死を乗り越え過ぎです。」

ふむふむ霊夢の言う仙人的なものになったからだめなのか！

「まあ俺は簡単には死なないからな。」

「死神がそちらに行きますよ。」

そんな奴。お茶出して帰ってもらおう。

「返り討ちにすればいいだろ？」

「仙人のようなことを言いますね。あなたもいつか不死身になってそうですね。」

まあな。

そして神社へと帰ってきた。

「あ…あんだ…何事もなかったの…？」

「特になにもないけど？」

「あのぼしばしは二度と喰らいたくないのよね。」

一体そのぼしばしとはいかなるものだったのか。

花の妖怪と太陽の畑

夏が来たぜ。

三月精とかいう妖精から太陽の畑という花畑があると言われて、魔法の森へとやってきた。

「この先にあるらしいが…」

歩くに連れ木が少しずつ減っていき日が差してくる。

一切いなかった妖精が増えていきやがて黄色い向日葵が見えてくる。

「お？珍しく嘘じゃないのか…」

畑に立ち入った瞬間なにかが首をかすめる。

「…とどめを刺すつもりだったけれど…」

緑色の髪を流したショートヘア。

狂気に満ちた笑み。

可愛らしいフリルのついた日傘。

花の妖怪。 幻想郷有数の有権者。

風見幽香

「私の畑に立ち入るなら…」

その続きは声に出さず弾幕が飛び交う。

ってこれどつかで見たことあるし！

「手形『西行寺霊 センスオブチュリーブロッサム』

蝶のような弾幕が幽香の弾幕を消し去る。

「花符『幻想郷の開花』」

密度高くね…

通常弾幕であれだったのが…

スペカはここまで来るんかい！

「恐怖『無双不敵』」

弾幕を無効化する。

あれ結構長くない…？

5秒じゃ足りない！

「武符『アルレベントレーザー』！」

「ッ！！」

そこにチルノが通りすぎる！

チルノに直撃はるか空の彼方へ！

両者引きを取らない戦いだ…

「桜符『煉丹されし幽霊花』！」

俺の足を中心に花が咲く。

この花はすべて死者の具現。

胡蝶の弾幕が向日葵に留まる。

「いっけ！」

蝶の弾幕が向日葵から飛び立ち幽香を襲う！

決着は戦い始めてから半刻立った頃だった。

「貴方、花が好きなのね。」

「おう…」

幽香にお茶を入れてもらった。

そしてケーキ（宴会の余り）をどうぞ！（唐突…かな？）

「美味しいわね…」

と渡しなさい。

うちの畑を使っていいからもつと作りなさい。そしてもつ

なんとまあ俺ケーキで花の妖怪を手懐けてしまった。

「それにしてもケーキうま。」

そして俺は自由に畑を使つていい許可が降りた。

いえーい！せつまい神社の畑からはおさらばだ！

いえーい！

そしてお茶を飲み終わつたらとつとと帰れと言われた。

扉を開け外に出ると、

「…」

なんかいる。

でっかい蝶の羽。の妖精？妖怪？がいる。

それなりにつおそう。

「おいそこのあなた！」

…？

「あつかんべ〜！」

…!?

「べろべろばあー」

…
はっ！

「悔しかったらここまでおいで！」

妖精が精一杯の煽りをしてくる。

いや妖精にしては上出来か…

「しばくか、」

手のひらの中に炎を出す。

「…魔力に変換！」

炎は大きく膨張し、人の丈ほどになる。

「火符『ファイアアタック！』（名前適当）」

大きな炎をくるりと回し妖精を攻撃する。

あっけなく妖精は吹っ飛んでいった。

人里防衛編 Case 1 『楓の不在』

「霊夢！大変なのぜ！」

今日もまた魔理沙がやってきた。

「なによ。」

「人里に妖怪が……！」

……なんだ。また妖かい……

「ええ!？」

人里に妖怪がやってきた。

何しろ日本においても歴史深い木綿妖怪だそう。

「早く行きましょ。」

く人里く

「あつ！巫女さんが！」

「来てくれたか……」

大勢が集まる中で博麗の巫女。すなわち私が木綿妖怪が出た里の南東に向かう。

「あいつだぜ。」

魔理沙が指さした方角には白い布をまとった妖怪。

一反木綿。

「…巫女　　ね。」

私の気配に気づき妖怪が振り返った。

「退治しがい…はあまりなさそうね。」

「巫女が出るまでもないと言ってるぞお。」

「こんなよわつちよろい妖怪、どこぞの傘妖怪並に弱そう…

枝で勝てそうね。」

「私はただの木綿妖怪じゃないわさ。」

「さあね。」

弾幕を放ちそれを妖怪がかわす。

ちよこまかと…

「喰らえば！　綿符『白布の滝』」

白色の大弾に、くない弾

密度もそこそこ。

ボムはなしでいいわね。

「さすが巫女。」

まあ伊達に商売やってないからね。

「色符『色相環の染付 藍』」

濃い青色の弾幕。

密度はない。でも、速い：

避けれない程じゃない。けど

鬱陶しいわね。

スペカは、使わなくていいか：

そう思いながら再び弾幕を放つ。

布のような動きでサラリと避けられる。

こいつ楓と違って異質なスペカは使わない。

平凡な弾幕。

「色符『色相環の染付 鶯緑』」

淡い緑。いや黄色にも見える弾幕。

目がチカチカするわね。

今度は密度も速さも全然だけど、追尾性がある：

あらゆる性質の弾幕：

「もうめんどくさい!」

「霊符『夢想封印』!」

高密度の弾幕が妖怪を囲む。

「避けられた!?!」

こんな半端な妖怪に?

「三原色『マゼンダ・イエロー・シアン』」

色とりどりの弾幕が降り注ぐ。

密度は高く、速度も速い。

これは食らいがいいか。

「御札『夢幻の高速祈願札』」

大量の札が弾幕をかき消す。

「布符『傷入りのダメージデニム』」

弾幕が霊夢に近づく。

巫女服を切り裂く。

「痛ッー」

傷が深いことがわかる

途端、意識が遠のく

この妖怪。ただの妖怪じゃない…

「おい！霊夢ー！」

魔理沙の声が近づく。

意識が途絶えた。

「大丈夫か!？」

切れた肘から血がたれている。

「ここは引くに限るぜ。」

スカートの中に手をつ突っ込み魔法陣の書かれた小さい紙を取り出す。

一言文を読むと大きな陣が地面に現れ、魔理沙と霊夢が消える。

「それではばいばいわさ。」

そう言い、妖怪、一反木綿は人里へと踏み出した。

色の染み付いた布切れを残して。

その妖怪は、ただの妖怪ではなかった。

人里防衛編 Case 2 『茸』

さあさあやってきましたよ！魔法の森！

きのこ！きのこ！

今夜はきのこで鍋だ！夏に向けてスタミナつけるぞお！

だがな…

やばい心配がつ！

森の中にやばいやつおる！

絶対！つおい！

まあぶつ倒せば問題あるまい！

そう意気込みながら森に入っていた。

く魔法の森 奥地く

きのこ！きのこ！

結構あるな。うまそお。

そこに真つ赤なきのこ。

絶対に毒あるやつ！

食べたら終わる。人生が！

(私の縄張りに立ち入るな！)

脳裏をつく声。

まさか。こいつがああの気配!?

白い布をまとった少女。

「一反木綿？」

「出ていけ！」

一反木綿が叫ぶ。

「悪いが…出ていくつもりはない！ なぜなら！」

「きのこが食べたいからだ。」

「ならば。本気で！」

「綿符『白布の滝』!!」

うおつと！

「模技『夢想封印』！」

弾幕をぶつけ合う。

夢想封印を避け、残りの弾幕が降る。

それを避けるため後退する。

「色符『色相環の染付 鶯緑』」

緑の弾幕…

それを次々に避ける。

ツ！避けきれない…！

「殺す。」

こーわ！怖い。めちやくちや怖い！

「色符『色相環の染付 紅』！」

今度は赤！

かなり押されている。

っおい！

避けては攻撃し避けては攻撃。

ヒットアンド アウェイでどうにかしてるが…

周りの木がだんだんと減ってくる。

森から出るぞこれ…

ばさっ！

その音とともに妖怪が飛び立ち高速で南に向かう。

そっちは…！人里だぞ！

「ちようどいいい！人里を蹴散らすわさ！」

「脚力に変換！」

急げ！

く人里く

ドゴォーン

轟音とともに家が潰れる。

そこは空き家だから大丈夫だな。（大丈夫じゃない。）

「彩度『三十四相環』」

色とりどりの弾幕が降る。

「もうきたんだ！人間にしてははやいわさ！」

「武器『偽慥剣』」

手の中に剣が現れる。

両手で剣を握り突進する。

弾幕を左 右と避け斬りかかる。

「武符『アルレベントフレア phasel 』斬撃』剣聖』！」

偽慥剣が炎を纏い大太刀を象る。

切れないッ！

攻撃が入りづらい。

布だからじゃない。こちらは炎を使ってる…

こいつ大妖怪並に強い！

弾幕が放たれる。

「あつぷっ！」

やばいぞお！これ受けたら幽々子にお世話になってしまう！

『Phase 2 『魔撃』

炎の柱が幾度と立つ。

最大限の力が出せない！

なぜなら人里だから！加減しないと燃えちやうから！

『Phase 3 『砲撃』超^ガ大量射撃^リダンマク^グ』

大量の銃弾が放たれ、妖怪をかする。

やっばいじゃん！これ避けるとか！ガトリングやぞ！

怖い！霊夢並みに怖い！

大量の葉莢が道へ転がる。

人里の人間がこちらを見上げて口を開けている。

飛べるって最高！

魔法って素晴らしい！

という思いを噛み締め。

というか霊夢はまだか…この騒ぎだ、絶対にわかるはずだが。

「しづといわねえ！ 三原色『マゼンダ・イエロー・シアン』
怖いなあ！この弾幕う！

「三原色『レッド・グリーン・ブルー』」

2枚切りとか聞いてない！

「恐怖『無双不敵』!!」

重い！滅茶苦茶重い！

衝撃が体を走り地面に叩きつけられる。

「くぼっ！」

背骨をやりました！

幽々子これから世話になるぜえ！

∴その後駆けつけた霊夢らにより討伐とまではいかなかったが妖怪は森に追い払われたそう。

全治一週間だつてよ。

本来ならそれ以上なきがするが∴

結論 永琳はすごい。

慧音先生の熱血教室。

（人里）

先日の件でそこそこに尊敬されている俺だが、現場に居合わせた子供から話が広まり、子供を中心に人気が上がった。

そして里の人間を中心に妖怪や妖精なんか（人外のほうが多い気がする）も通う、寺子屋でゲスト的な感じで臨時の副担任になった。

受け持つのは1組。

メンバーは、一番前にチルノその横に大妖精。

チルノの後ろにナースリン。

そしてリグルだ。

主任任は上白沢慧音。チルノ曰く、すぐ頭突くらしい。
怖いなあ

「今日は先日、人里に攻めてきた妖怪の侵入を食い止めた。外来人の徒花君に来てもらった。」

「てーお兄ちゃんだあー！」

チルノ。

「あ！チルノちゃんからお話聞いてます！」

と大妖精。

そうか、俺からは見たことあったから知ってたが、向こうからは面識ないのか。

「おなかすいたのだー！」

おいルーミア。まだ一時間目始まってねえぞお。

「うえええええええええ！」

ナーズリンが発狂している。キャラ崩壊では？

「とにかくそれじゃあこの問題わかる人！」

そう言い黒板を指差す。

2+3！

うーん！ものすごく難しいからね（棒）

「いちい！」

チルノお！すまんが一ミリもあつてないぞお！

「えーと。5？ですか？」

「大妖精。正解！」

うん！なんてレベルがひくいのだ！

「じゃあ次これね。」

5 + 8 !

「はい！」

元氣よく手が挙がる。

「よし。じゃあチルノ」

「えーとね！3！」

うーんもう気にするのをやめよう。

「13です。」

リグルがぼそつという。

「正解だ。」

リグルは寺子屋では静かなタイプらしい。

よくいるよね。

露骨な尺稼ぎのコーナー！

脱力小説『パルスイがばるばる言うだけの話』

注意※この小説はものすごくおく適当に作られたものです。

「妬ましいわね」

今日もまた地底に眩く。

誰も聞いてない。

誰一人聞こうとしない。

地底それも旧灼熱地獄跡地の最深部。

昔、「橋姫」として祀られていた妖。

水橋パルスイ

地底にたった一本の木は彼女の憩いの場でもある。

やせ細った大木に何百の藁の人形が打ち付けられている。

「誰もかも、何もかも。」

彼女は陽の光とは無縁。

彼女にとってはすべてが妬みの対象なのだ。

自分にすら嫉妬する。

自ら自身も見失うほどに。

「今日もまた、一段と眩しい。」

大きな緑の瞳。かつて人々が崇めた橋姫の緑眼は睨みつけるような眼差しで木を見つめていた。

細めた瞼。

奇麗な瞳が隠される。

「ふふっ。」

一瞬にこりと笑う。

誰かを思い出したのだろうか。

遠い昔の話しか、つい昨日のようなことなのかはわからない。

「叶いはしない。何もかも妬ましい。」

水橋パルスイは、

ジェラシーに満ちた瞳をどこかへ見せつけるように大きく瞼を開いた。

特別回 七夕のお願いごと

明日は7月7日。

なんの日かわかるかい？

そう七夕だよ！

「七夕……？って何なのぜ？」

「えーとね？」

博麗神社に広がるのは大していつもと変わらない朝だった。

「あれですよ！知らないんですか！」

早苗が驚きを隠せず口をぽかり。

「なんの話してんの？」

俺が口を挟む。

「七夕ですよ！楓さん！」

あああれね。彦星と織姫のやつ。

「というか魔理沙さん知らないんですか？」

「何だよ七夕って。食べ物ではなさそうだが。」

なんていつもどおりなんだ。

「てか魔理沙のスペカにさ。」

「あたしのスペカがどおしたんだぜ？」

魔理沙が首を傾げる。

「『ミルキーウェイ』ってやつあるだろ。『天の川』って意味。」

「だからそれがどおしたんだぜ？」

地面に付きそうなほど首を傾げる。

「天の川は七夕の物語の舞台なんだよ。」

ふむふむという顔で魔理沙が見つめる。

「つまり星に関係があるってこと？」

霊夢が聞く。

「まあそういうことだね」

「星だと！それは興味深いんだぜ！」

星マニアが食いついた。

く博麗神社 茶の間く

「七夕はお祭りなのよね」

「まあそうだな。」

霊夢の目がキラキラと光る。

「つまり！金儲けに使えるってことね！」

早速祭りの準備よ！とか言つて参道の清掃をさせられた。

く博麗神社 参道く

それにしてもこの参道、里から遠くね。

「あーお兄ちゃんなのだー！」

参道の脇道から人食い妖怪、ルーミアが飛び出してきた
そのまま突つ切つて参道の反対側へと過ぎ去つていった
何だつたんだ：

7日夜

「よつてらつしゃい！見てらつしゃい！博麗神社の七夕祭だよ！」

霊夢が賽銭箱の上でハッピ着て叫ぶ。

いやあそれにしてはみごとに晴れたな。

空には天の川が輝く

「あつ！おにいさまあ！」

おつフラン！

「こんばんは。」

レミリアも。

「祭りだと来てみたが、何なんだ？ 一体。」

「お姉さま！あれなに！」

フランが笹の葉を指差す。

「楓？あれば何なんだ？」

あー

「これはこの紙に願い事を書いて、この笹につければ、願いが叶うってやつだな。」

「書く！」

フランが早速ペンを手に取る。

「色んな色があるのね。フランは何色がいい？」

フランは何色にするんだろう。

「えーとね。あかいろ！」

うん知ってた。

レミリアは紫色の紙を取りペンのキャップを外した。

「うーん？」

めっっちゃ考えてる。

「咲夜ちゃんもどうぞ」

「さささ咲夜ちゃん… いえ。それでは。」

咲夜ちゃんも紙とペンを取り願い語を書き始める。

ひととおり書き終わったところを見てレミリアが言った。

「ふたりはなんて書いたの？」

「あたしは！お兄様と結婚するうー」

「はっ。」

なーんで？いやフランならいいか。いやいやいや

俺は495歳児を好きになんて…うん無理。

「まあそれは置いといて、咲夜は？」

「私は…皆さんとできる限りずつといたいなど。」

咲夜ちゃん。そういうとこだぞ。

咲夜ちゃんの可愛いとこ。

「そういうお姉様はなんて書いたのよ。」

「え？いや？別に… そんなことよりこのあとはどうすればいいの？」

一同（（誤魔化した…））

「笹に紐でくくりつけるだけでOK。」

3人が笹の方向に向かう。

その後ほんの興味でレミリアの短冊を見た。

それがな…ここからの記憶がないんだ。

不思議だろ？

第3・5章 月の動きと線香花火

月の動き

「あうあうん！」

「腹立たしい！うんがあー！」

「じゅっ！純狐様？」

「どうしたんだ急に？」

く 仙界く

「そろそろ。月の都、滅ぼすわ。」

「どうした急に！」

仙界の中心部。

どでかい椅子に座った仙霊。純狐。

その椅子によっかかり純狐へとつつこみを入れるのは

地獄の女神、ヘカーティア。

そして妖精、クラウンピース。

「…嫦娥絶対殺す！」

そして月侵略が始まった。

その頃：

く幻想郷 博麗神社裏く

「いやあ花見か。いいねえ。」

「幻想郷では毎年やってるのよ。」

ふえー

桜の蕾が少しだけ開く。

「そろそろ咲きだすかな？」

「そうね。」

花見をする予定なのだが。

今少し異変が起きている。

花が異様に枯れるのだ。

前に、変に花が咲いたときがあつたが。

逆に花が枯れる。

うーん誰の仕業だあ？

河童の除草剤？

誰かが、食べたとか？
そんなわけ無いか？

く無名の丘く

というわけで、直近の異変が起きた場所に来てみたが、
変に一直線に花が咲いていない。

花の咲いていない場所にはからからになった植物。

こんなへんな除草するか？

まあこの異変があんな大きな異変になるとはつゆ知らず、
花見の準備は進められるの
であつた。

「てゐを吊るす」

人里防衛？の後、永遠亭に運ばれた。

「まあ見事に軽症ね。」

「おっおう」

永琳が点滴のあとに絆創膏を貼りながら言う。

「たっだいまですー！」

おっとうどんげが帰ってきたようだ。

「今日も全部売れましたよ！」

右手を高く挙げグツ！とサインを送る。

そしてしばらく休みを取り：

御札よし！

スマホ（使えない）よし！

財布：

無い。

「ぐひひひひひ」

てゐか！

今度こそそろそろ。

「武器『偽慥剣』」

まてい！

「…脚力に変換！」

うおりやあああ 追いついたあ！

「じゃんけんで勝負じゃアア！」

「いいよー」

「じゃんけんポン！」

俺 パー

てゐ グー

「勝った！」

「それじゃあ財布を返してもらおうか！」

「返すウサ」

「おう」

「なんてウソだよーだ！」

あのクソ兎！

偽槌劍片手に斬りかかる。

「ひゃっ！」

「ひゃぐ！」

「びゅへ！」

ちびちび攻撃してたら慌てて財布を落としていった。

「でもさ……」

「お仕置きが必要だよね！」

〜人里〜

「もうやめてえ〜」

「やだ。」

「反省してるウサ！」

「断る。」

てゐは今人里のど真ん中に逆さ吊りにされている。

体中真っ赤になって。

「やめてえ〜 もうやらないウサ！」

「だめ」

そんなことを続けていたら、霊夢がやってきた。

「あんた、今度はなにしてるの？」

「てる吊るしてる」

「それはわかるけど……」

「まあ私も混ざろうかしら」

第一回 三途の川フィッシング大会

「博麗神社」

「ごめんくださいえー！」

「何よ。」

「どうした霊夢？」

博麗神社の玄関に立っていたのは三途の川の船渡し。

小野塚小町である。

「実は、博麗神社の方にも渡そうと思いましたが…」

「何がよ。」

小町が着物の懐から一枚の紙を取り出した。

「チラシ？」

チラシには『三途の川フィッシング大会』とおつきんくさいネームで書かれている。

「へえー釣りかぁ。」

幻想郷において川といえば三本だ。

神社の方から人里付近へ流れる聖水と呼ばれる生活用水。（生活用水でいいのか聖水

よ)

妖怪の山から注ぐ川

そして三途の川だ。

「楽しそう」

「だよねだよね！このチラシくそ趣味悪いけど面白そうだよね！」

そこは認めていいのか？

「いや、このチラシのセンスは上に言ってくれ。」

上司…つてことは映姫…!?

えぐいなヤマザナドウ。

まあ出ることになったよ。

「あーえーえーと。」

壇上で喋るのは映姫だ。

「本日は、この三途の川フィッシング大会？にご参加いただきありがとうございます。」

「えーと制限時間は3時間です。最もたくさん釣った人が優勝？だそうなので頑張ってください。」

閻魔様による挨拶が終わり人が上流下流（三途の川って流れているのか…？）へと散

らばっていく。

俺のセツティング位置の近くには、河童一行がいる。

早速支給された釣り竿に餌をつける。

「えいー！」

針を川に垂らす。

しばらく待つ！

びちよん

浮きが沈む。

「かかったー！」

リールをぐるぐる回して引っ張る

釣れた！

竿の先に引っかかっていたのは、頭がガチガチの骨のようなもので固められたでかい魚が引っかかっている。

「あーめいゆー！」

横からにとりがやってきた。

「お！早速でかいの釣ってるねえ」

「こんなん釣れるんだな。」

「ああ。ダンクルオステウスなんて釣るなんてすごいぞ盟友！」

「さ、さんきゅー」

河童一行の方にはでかいサメが吊るしてあった。

三途の川恐るべし。

てかここを泳いで渡ったん？やば。

しばらく釣りを楽しんでいたら、

色々釣れた。

でかいイカとか

アンモナイトとか

なんでか河童も釣れた。

河童の川流れ…

そして、大会の結果は

一位は、天狗。2位が河童という山の妖怪トップが並んだ。

3位は山姥とか言う妖怪だった。

え？俺は何位かって？

6位だよ。

6位は最下位だよ。

めっちゃ悔しい。

次あるときはがんばろ。

帰りに久しぶりにそば屋によった。

相変わらず人里でかなりの美味さだ。

天手からある話を聞いた。

最近、謎の鉄の塊が草を枯らして歩いていくという噂を聞いた。と言う。

あれ？それってあのとときの機械？

植物を枯らす…

線香花火のかほり

夏だ！

夏といえば花火！

紫から線香花火のパックをもらったぞ！

というわけでみんなで花火をしよう。

く夜 博麗神社く

「なんで家でやるのよ」

「まあまあいいじゃないの」

花火のフィルムを開ける。

左には霊夢。右に魔理沙

更に右にチルノ。俺の正面にルーミア

そしてパルスィ

なぜかやってきた。

「花火なんて妬ましいわね。」

なら来るなよ。まあいっばいいいたほうが楽しいけども。

「お兄ちゃん！これから何をするんだ！」
とチルノ。

「花火だよ。　じゃあ試しに手本見せるな。」

袋から一本取りだし

火魔法でろうそくにぽつと火を付ける。

それぞれが花火をもつ

花火の先端をろうそくに近づける。

少し煙が上がる。

ろうそくから外し、垂直に固定する。

先端がオレンジ色に染まり次第にぱちぱちと火花を出す

「きれいなのだあー」

「ほしみたいなのぜー！」

ルーミアと魔理沙がはしゃぐ。

チルノはただただじつーと見つめている。

チルノってこういうときはおとなしいよな。

あーみんなかわい…

ほど。

オレンジ色の玉が落ちる

「消えちやった…」

「今度はみんなもやってみて。」

それぞれが袋から花火を取り出す。

「まずは私がするのだー」

ルーミアが花火で火をつつく。

闇がより一層夜の暗さを深める。

そこにぼつり花火の光

ぱちぱちぱち

火花が大きく光る。

玉が弾け周りが暗闇になる。

ろうそくの火が消えている。

チルノが火をつついていた。

「ばかっ」

そう言いながら火をつけ直す。

パルスィが一言も発さずじーつと火に花火をかざす

パルスィの花火はかなりの間ぱちぱちと音を立てていた。

「今度はあたいがやるうー」

チルノがろうそくに花火を近づける

火がつく。

先が膨らむ。赤く染まる。

ぱちぱち

「できたあー！」

落ちる。

((((早ッ)))

全員が同じことを思いながら花火を楽しみ、最後に残った一本は大事に博麗神社に保管された。

「なんだこれ？」

後日人里の人間が、神社境内で謎の棒のようなものが発見された。

その棒のようなものは上白沢慧音を通し香霖堂の店主へと渡った。

霊夢が引き出しを見たとき、花火がなくなっていた。

外来産ということから、外来品には目のない森近霖之助を訪ねた。が

「今は手一杯だ」とか言って入れてもらえないらしい。

「これは何なんだ？花火？」

「燃やすもの……？」

「おっお香的なもの……なのか……？」

線香花火の行く先はしばらくの間、見つからなかったが、無事に見つかりより嚴重に保管された。

この花火が神社の御神体になるのは、また別の話。

どこかで物音が聞こえる。

霊夢は、ひんやりと冷えた冷蔵庫に、頭をつつこんでニヤニヤしている。

「これなら、半霊探して捕まえないで済むわね!」

こつちはクソ暑いんですが…

プラグを持った左手がだんだんと悲鳴を上げだす。

ついには煙が出てきた。

「えっちよちよっ!」

さらにオレンジ色が出てくる。

「ちよちよ!ももも燃えてるっ!」

咄嗟に手を離し、井戸へと走る。

やばやばっ!

プラグを持つのはよくない!

よいこのみんなは真似しないようにいいい

あちいあちい!

井戸から急いで水を汲み手をつつ込む。

「アツ熱ツツウウ熱つつ…つ…ツ…ツ…ツ…!ウ…ツ…ツ…ツウ…ツウ…ツウ…ツウ…」

！…ッ…アア…ッ…ッ…!!…

追い打ちをかけるかのごとく、火傷にお湯が染みる。

「うふふっ」

笑い声が聞こえる。

「そっその声はっ！」

紫色のくせっ毛。

薔薇の描かれたワンピースに

特徴的な赤い第三の目^{サードアイ}

「さっさとっ！」

「ええ」

「温めといたわよ」

…なんやこいつ

痛みが…っ！

耐えきれずその場にうずくまる。

その時、

「ぎいやあああ！」

土間の方から悲鳴が聞こえる。

霊夢の声だ。

全身に真つ赤なまま匍匐前進ほふくぜんしんで声のもとへ向かう。

ちようど土間に入ると、目で目の前に現れる。

現代において冷蔵庫につきもののやつが…

ちよつと口で言いたくないあいつが!

触角垂らしてこちらに近づいてくる。

茶色いあいつが平べったいあいつが。

「いひひ」

「うわやあー!」

背後で何かが落ちた。

「あつ」

振り向いた視線の先にはでかい虫。

改めリグルがいた。

「お前か。」

「にげろー!」

そのままとことと参道を降りていく。

目の前のそれは頭の上をわさわさと通りリグルを追っていった。

「楓？準備はいいわね？」

茶の間まで避難していた霊夢が針を持って玄関に立つ。

「もちろん」

翌日より鳥居に蟲妖怪が吊るされた。

そのせいで参拝客が減る一方、博麗神社には安泰の日々が送られていた。

賽銭はないけど・・・

毒々しいね

「花見…:できるかしらねえ」

霊夢がぼそりという。

「そうだなあ」

段々と桜が咲いていく中、未だ花枯れ異変は解決を迎えていない。

「そーいやあなんかロボットみたいな蜘蛛見たけど…」

「なにそれ？ロボット…:河童が作ってるやつのこと？」

それが河童に聞いてもわからないというのだ。

しかもそいつが通った後は草が枯れるときた。

それが異変に関わってるとはたしかだが…

く無名の丘く

もつかい来てみたはいいが…

こりやまた鈴蘭がはげてらっしやる。

しばらく歩いていると左足にちくりと痛みがする。

とつさに足をあげ痛みの方を見る。

赤くぷつくりと腫れている。

虫にでもさされたか？

急にめまいがし意識を失う。

気づいたら洞穴の中にいた。

目の前には小さな女の子。

匂いからして人間ではないが…

「あなた間抜け」

は？

その女の子の第一声は毒のような痛みを俺に与えた。

実際毒で倒れたのだが。

この少女の名はメデイスン

元々人形らしい。

俺は鈴蘭の毒でぶつ倒れていたところを発見したらしい。

人間嫌いとのことだが、意外と優しく接してくれる。

お茶まで入れてくれたのだ。

カップを口に。

花のような香りが優しく包み込む。

「ふがっあ」

飲んだ茶を吐き出して首を抑える。

猛烈な吐き気と痛みが襲う。

これはっ…毒ッ…

「どおしたの？」

悪気を感じない純粹な声。

無自覚で入れているのか！

数分たち落ち着いてきた。

「毒を入れるのはどうなんだ」

「あー人間は毒が効くのか…」

知らなかったの…

うそん。

「あなた他の人間と違う…」

「なんだろう似てる、妖怪」と

まあその後毒の盛られた茶菓子やらなんやらを食べさせられ数度気絶したが2、3
時間で脱出に成功した。

もちろん強固突破ではないからね

「調査のはずがとんだめにあつたな…」

あれ？

なんか足が引つ付いてるぞ？

靴がべつとりと地面に付き離れない。

靴の裏からはみ出す白い塊。

「まさかまた毒っ！」

というわけではなくどうやら餅のようだ。

もっちもちだもんね！

でもなんでここに餅が？

後方に気配を感じる

腰より上だけを後ろに向け気配の主を探す。

「何だおまえっ」

木に電飾を 【紅魔館のクリスマス編】

博麗神社 縁側

「寒いですね。」

現在早苗と外来人組で話している。

「そうだな」

「てかクリスマスですね。」

「そうだな」

「楓さんbot化したんですか」

冬になって困ったことがいくつもある。

まずは幻想郷に暖房器具が少ない。

神社には囲炉裏とこたつしかないのだ。

かと言ひ、紅魔館（暖炉とか）や香霖堂（ストーブ）に行くのは寒いし面倒だ。

2つ目にチルノだ。

ことなくそ寒い中絡んでくるのである。

夏はじゃんじゃんカモンなのだが。

冬に引っ付くのはやめていただきたい。

最後！

霊夢が正月まで働かないというから毎朝鳥居の周りをはかなくてはならない。

これもまた寒い。

さらに昨日から雪が降り出した。

ふざけんよ。

まあそれは置いといてもうすぐクリスマスである。

早苗によると幻想郷には未だクリスマス文化は根付いていないのだという。

まあ幻想郷とか基本神道と仏教とせいぜい道教ぐらいでキリスト教徒はほぼいない

と思う

少なくとも会ったことない。

まあクリぼっちになるのは嫌なのでクリパ開こうと。

てなわけで来たのは幻想郷で唯一！クリスマスが似合う場所！紅魔館にやってきま
した！

門の前で美鈴が寝ている。

突破しましょう。

く2階く

「よっレミリア!」

「あつ楓。ちょうど暇してたところよ」

「そこである提案があるんだが…」

かくかくしかじか

「クリスマスパーティー面白そうね。」

「だべ」

クリスマスといえば!

1 ツリー!

2 ケーキ!

3 プレゼント!

な気がするので早速作っていこう。

紅魔館の庭にはなんと都合良くモミの大木がある。

みんなで飾り付けをしよう。

23日夜。

レミリアとフラン、咲夜が庭に集まった。

パチエはパラソルにサングラス、レモネードと2回のベランダで夏を満喫している。今冬ですけど。

とりあえず紫にこつそり頼んで外の飾りを

仕入^盗れ^んでもらった。

「いいかレミリアっフランっ！」

この丸っこいやつをまんべんなく葉っぱにかけるんだぞ」

「了解！」

高いところは飛べる二人に任せて下の方を作業するぞ。

まずは木の根本が汚いのでシートをかけておきましょう。(赤くてなんかそれっぽ

い)

「かえでー」

レミリアが飾りの入った箱の中を探りながら言う。

「これなに」

レミリアの手にはでかい星。

「星」

「いやそれは見ればわかる」

的確なツツコミ。さすがお嬢様ですねー

「木のてっぺんにつける用の星だな」

「つけてくるー」

星を頭に乗つけてみたりしながら木のてっぺんへと飛んでいく。

ぐさっ

あとは電飾とつけて完成かな。

てなわけで続いてケーキ作っていこう！

~~~~~

「さあケーキもあらかたできたし、他の人も招待しますか！」

「「おー」」

く博麗神社く

「クリスマスパーティーって何。」

霊夢を誘ったらそもそも知らなかった。

まあ洋風版宴会って感じ？と返しておいた。

くクリスマススイブ夜 紅魔館く

「あつレミリアじゃない！あんたも来てたのね。」

霊夢が言う。

「あんたもって、あくまでわたしが主催なんだけど……」

「酒持ってきたわよ。」

そういつてクリスマス感0の風呂敷から木箱を出す。

ワインか何かかと思っただけど。

「じゃん！博麗神社特性！焼酎！」

レミリアと俺愕然。

（なんか違う……！）

紅魔館主催のクリスマスパーティーだが、霊夢や萃香なんかのせいでいつもの宴会と

さほど変わらなくなった。

あとはチルノが電飾をくわえてやけどしたとかぐらいだ。

く翌日く

博麗神社 楓の部屋。

「あれ。どこいった。」

たんすの中を念入りに探す。

貯金やら、腕時計なんかの貴重品が全部ない。

「霊夢ーたんすの中見てないー?」

台所からあつたか重装備で現れた霊夢が言う。

「見るわけ無いでしょ。気持ち悪い」

てことはまさかっ！泥棒っつ！



## 第4章 月の侵略と唐傘の刀剣 餅をつこう。

どうしたものか…

妖怪ウサギに遭遇した。

いやそれだけならいいんだが。

今俺はものすごく強力な粘着力の餅により足を完璧に固定されている状況にある。  
そして四方八方から銃を突きつけられている。

うーん。

どうしたものか…

とりあえず両手を挙げておこう！

「この地はそろそろ浄化されるのだ！」

その中ではまあまあ上の人っぽいやつが言った。

何を言い出したんだ…

「まあとりあえずお前には消えてもらおうっ」

…！

「おいっ地上人っもう少し怯えるとか逃げるとかないのかっ！」  
なんか怒られた。

餅のせいで動けないだけなのにつ

「まあいいつやつてしまえっ！」

手下的な奴らが銃の引き金に指をかける。

「ちよちよっ！」

鳴り響く銃声の音と同時に足元が焼けるように熱くなる。

餅が焼け切れたのだ！

なんだかわからんがやったね！

餅の焦げかすで黒くなった足はまだ少し赤らめている。

クソあちいっ！

遠くの木に人影がみえる

幼気な笑顔のなかの純粹な狂喜

メデイスンである。

あっこれ毒か。

といつてもどうするっ。

足が熱くて立ってれない！

霊夢だったら飛べたのにねっ！

いいなあ霊夢！

「よっ避けただとおっ」

浅葱色の兔が言う。

「しょうがないっ私が相手してやろうっ」

弾幕が張られる。

膝をついて上半身だけ動かし避ける。

弾幕はそこまで濃ゆくなく楽によける。

思ったより弱い…

「弾符『イーグルシューティング』」

スぺカキちやあ！

大量の弾丸が飛ぶ

中には鈴仙のに似た座薬つぽいのも混ざっている。

こいつら鈴仙と同じで月のウサギなのか？

「まあいい！」

毒で焦げた足の痛みを堪えながらこちらもスペカ発動！

「反射『石凝姥命いしこりじまのの鏡』」

大量に飛んでくる弾丸にむかって膜を張る。

弾丸が膜に触れたその瞬間

時が止まったかのように弾は止まりくると後ろを向く

そして再び時が進む。

「なにっ！」

弾丸は青髪ウサギを突き抜け蜂の巣にする。

周りにいたウサギたちはそれを見てそさくさと逃げていった。

「なんだったんだ？」

とりあえず永遠亭に行こう。

治療のついでに優曇華にこいつのことを聞いてみよう。

てゐるならなにかわかるかもしれない。

青髪ウサギをかついで迷いの竹林へと向かう。

く迷いの竹林く

くそお

足が死ぬほどかゆい。

毒の効果つて火傷じゃなくてかゆみなんかい！

あー かゆいいいい

迷いの竹林はその入り組んだ道と妖術で非常に迷いやすいかゆみにより集中力の落ちた楓にそれを突破することは難しい。楓はまる半日かけて永遠亭へと向かった。

その一方で玉兎ら月の勢力の脅威はまだまだ知らない話

## 紺珠

く 永遠亭く

「ふむふむ」

現在妖怪ウサギについて鈴仙に聞いている。

「確かに月のもので間違いなさそうですね。」

サー

障子戸が開き輝夜が顔だけひよこつとだして言う。

「永琳が呼んでる…薬出すって…」

「わかった」

居間から出て診療室に向かう。

「しばらくはかゆみが続くだろうからかゆみ止めだしとくわね。」

「さんきゅ」

「それと玉兔の件、鈴仙から聞いたわよ。」

「という作戦よ。」

「ふむふむ」

永琳が言うに

玉兔の能力のひとつテレパシーで盗聴しよう作戦をするそう。

敵の情報を得て対処法を考えてみよう…

く無縁塚く

「いきますよー」

鈴仙がヘッドホンを耳に当て目をつぶる。

…少女テレパシー中…

玉兔軍団「もぐもぐ」

玉兔軍団「もぐもぐ」

玉兔A「鈴瑚さん！」

鈴瑚「どしたー」

玉兔A「清蘭さんが地上人にやられたそうです。」

鈴瑚「ふーん」

玉兔A「そしてその地上人に連れ去られたそうです…」

鈴瑚「えー…」

鈴瑚 「まあとりあえず探すだけ探すか…」

鈴仙 「うあああああああ！」

鈴瑚 「ぎやあつ！」

鈴瑚 「テレパシーだと！まさか盗聴！」

鈴仙 「あつあわ…あわわ…」

鈴瑚 「テレパシーができるのは月のものだけ！」

鈴瑚 「まさか！裏切り者の優曇華院かつ！」

鈴仙 「バツバレたっ！」

そのころ無縁塚では…

青空の下ヘッドホンつけたうどんげ。

それを見守る永琳と俺。

圧倒的UFO。

あれ絶対月のやつだろ。

テレパシーは一方的に会話を聞くことはできない。



向こうの声がこちらに聞こえてくるようにこちらの音も筒抜けなのだ。少しでも大きな音をだせば即バレる。

まあそんななか月の噂は風に乗り

とある好奇心旺盛な幼児の耳へと届いた。

「なにしているの！ たのしそう！」

鈴仙の肩に両手をおいてそう言ったのは、

紅魔の吸血鬼レミアアスカーレットである。

「ぎやああああああ!!」

うごんげの悲鳴。

「「「あっ」」」

絶句する俺たちをみてレミアアが首をかしげる。

『まさか盗聴?!』

ばれたあああ!

『お前ら生かしておけぬ! 待つとけよ! 明日すぐ浄化しに行くからな!』

どうする…!!

く永遠亭く

「…でどうするのよ」

霊夢が沈黙を切る

いま永遠亭にいるのは俺、永琳、鈴仙、霊夢、魔理沙、レミリア、咲夜、てゐの八人だ。

「やつぱり先手必勝！ 奴らが来る前に叩きのめしてやるのぜ！」

たしかにそれもありかもしれない…

「乗り込むのは賛成よ。たかがウサギちよちよいのちよいよ」

レミリアも乗り気だ。

「乗り込むのはいいけど月は幻想郷の妖怪とは比べ物にならないわよ」

永琳が言う。

「それとこれを飲みなさい。」

これなに？

「これは紺珠の薬。」

被弾する未来が見え、何度でもやり直せるといふもの。

ただし副作用がいたい。

「私は飲むわ。副作用とか大したものじゃないでしょ」

霊夢が軽くフラグを建てる。

「あたしも飲むぜ。副作用はこわいかな…」

と魔理沙。

「私は飲まないわ。こんなものに頼るほど私は弱くないわ。」

レミリアア自信満々。

「私も飲みます」

鈴仙も飲むそう。

「楓はどうするの?」

霊夢が尋ねる

「俺も飲む。」

じゃあ早速行きますか!

おい誰が誘惑うさぎだ。

「何じゃあおまえええ」

玉兔が叫ぶ。

上空でふらふら飛んでいたUFOにどでかい穴が開く。

一番乗りで侵入したのは、紅魔館の主、レミリア・スカーレットである。

それに続き、巫女を始めとする人妖五名が穴から侵入する。

霊夢と魔理沙は高速で船内を飛行し弾幕を玉兔を一掃する。

レミリアと楓は早速、指揮官のいる操縦室に飛び込む。

「なっなんだお前たちは！」

「博麗のm「霧雨魔理沙！魔法使い！だぜ！☆」

「あんた何被せてんのよ！」

「すまんすまんなのぜ」

回転椅子に座っていた人物はこちらを向く

そこ座っていたのは、

赤みがかった黄色い髪にハンチング帽、例にももれずうさぎ耳をはやしている。

服はゆったりした部屋着のようで、周りのうさぎとは違いえらそう感がすごい。

「m g m g : であんたらなにしにきたの?」

「もちろん妖怪退治よ」

偉そうな玉兎は「うげっ」と固まる。

「m g m g まあいいでしよう。やってやりますよ」

「兎符『ストロベリーダング』」

波を描くような弾幕と無数の団子。

明らかに毒みたいに見える目をしている。

食べたらT H E 死! が目に見える。

一行は団子を華麗に避けるうねうね弾幕を相殺する。

いち早く接近した咲夜がスペルを展開する。

「奇術『ミスディレクション』」

大量のクナイ弾が飛び出し、U F O のコントロールパネルらしき機械にヒビを入れる。  
る。

突如咲夜が視界から消える。

偉そうな兎の後ろに咲夜が現れる。

その手にはナイフが握られている。

ナイフが放たれ、玉兔に向かう。  
ぴちゅーん

「であんたらこれからどうするんだ？」

玉兔（鈴瑚というらしい）とは和解？した  
「異変の元凶を潰しに行くに決まってるんだろ」

楓が答える

「なら助言をやろう！」

「アドバイスなのぜ！」

「私達は月の都という場所から来た玉兔だ。

詳しいことはほんとに首が飛ぶから言えないが

まとにかく幻想郷を攻めてるって感じだ

いま月の都は夢の世界とかいう胡散臭いところにあるから

そこに行けばいい。」

よしとにかく夢の世界とやらに行ってみるか！

楓たちはUFOを後にした。

「まあ第一月の勢力に勝てるとは思えないけどね…

………

それと純狐とかいう輩がいる正直近寄らないほうがいい…」

「あれいなない？」

鈴瑚はまだ話していた。

その後…

く地上浄化隊のUFOく

「あれえ おかしいなあ…」

困った顔で鈴瑚を見つめる。

「どうした清蘭…」

「うごきませええん」

コントロールパネルには亀裂が入っていて電源が入らない。

救命信号を送りたくても電源が入らなくては送れない。

「しょうがない…しばらくくこっちで過ぐすか…」

人里でこの二人が団子屋を開きあんな戦争が起こることを今はまだ誰も知らない…



## 夢の国によろこそ。

「いやといつても夢の国ってどうやっていくんだよ！」

とりあえず紫のスキマで行くか。

？少女移動中？

スキマから出る

「あれ？息が苦しくないぞ？」

紫によると、ここは幻想郷ではないが博麗大結界の中らしい。

……

「月が見えてきたぞ！」

スキマから出て数分、飛んでいると（俺は魔理沙のほうきに相乗りだが）大きな月が見えてくる。

「よおし飛ばすのぜ！」

ちよおおおおお！はやいいい！

超スピードで他のみんなを引き離し月へと一直線に駆け抜ける。

「うわあなんなのぜえ！」

突如周りが霧に包まれる

霧の中から現れたのは白黒の服を着た妖怪だった。

「貴方、相当な悪夢に取り憑かれていますね……」

「そっそうなのか？」

突如現るルーミア口調。

「そうなのだ。その悪夢私が処理しましょう……」

妖怪から大量に弾幕が張られ球体状に俺と魔理沙をつつむ。

「夢符『刈安色の錯綜迷夢』」

いっちょやってやりますか。

「魔理沙！行くぞ！」

「こっちは任せろなんだぜ！」

「せーの！」

二人はそれぞれ八卦炉を構え、スペルを詠唱する。

「恋符……」

「恋煩……」

『マスタースパーク!!! 双!』

二人の八卦炉から極太のレーザーが射出され弾幕を切り裂く。貫通したレーザーが妖怪をかすめる。

「くっなかなかやりおりますね… 本気でいきますよ」

「夢符『無我夢中』」

白い軌跡を残す青い弾幕が行き交う。

レーザーが減衰し十分な量の青弾幕を消せないまま消える。

弾幕の一つが魔理沙を捉える。

「魔理沙!!」

弾幕が魔理沙に直撃する。

爆発が起き、煙が立ち込める。

「魔理沙…」

嘘だろ…

その時、魔理沙のいたところが淡く光を発する。

容赦なく楓たちに向かう弾幕が消滅する。

まるで喰らいボムを起こしたように。

でも魔理沙がボムを使った様子はなかった。

じゃあなんで：

魔理沙の薄れた体が目に入る。

そこに霊夢たちがやってくる。

「あーあんなたちだけ先々行かないでよね。」

霊夢が叫びながら近づいてくる。

鈴仙が魔理沙を見て言う

「これは…まつまさか！紺珠の薬が働いている！」

「魔理沙さんになにかあったんですか!？」

鈴仙に説明する。

「その紺珠の薬ってなんなんだ？」

「紺珠の薬は弾幕ごっこで被弾して残機がなくなっても何度でも復活できる薬です。」

まじかちーとやんげ。

「あの一お取り込み中のようですけど、私のこと覚えてますか？」

妖怪が言う。

「覚えてないのぜ！」

目が冷めた魔理沙が言う。

「まあいいでしょう、悪夢は処理しときました。これから先は比べ物にならない悪夢―狂夢が待っています。覚悟はいいですか？」

「ああもちろんだ！」

楓たちは月の都を目指し夢の中の宇宙を進むのだった…

## 冷凍月都・フランのおやつたいむ

「カチコチじゃね〜か！」

目の前には寂れた都市。

まるで人がいなくなってしまうたみたいだ。

それに凍っている（物理）

「貴方たちまさかあの猿倒したの？」

壁から顔をだしたのは片翼銀髪かたはねの少女だ

おそらくここの住民——月の民だろう。

「猿って何のことよ？」

霊夢が問う。

「え？ドレミー・スイートっていう白黒の猿の妖怪見てないの？」

「あいつかピンクのホワホワ持ってたやつ」

「そうですか…あなた達が…」

「いいでしょう。力試しといきましようか。」

月の民から大量の札が放たれる。

「玉符『烏合の二重呪』」

「私の名は稀神サグメ……」

陰陽玉が隊列をなして飛来する。

「私みたいな攻撃方法ねセンス無いけど」

御札には霊力ではない力がかかっているようだ。

変に攻撃したら嫌な予感しかない。

“力”といえば俺の出番だろ。

『力を変換する程度の能力』

札に閉じ込められた力を霊力に変換する。

「スペルカード 靈符『ソウル・コントロール靈動支配』」

札は楓の支配下に置かれ誘導される。

札は楓たちを避けるように進み宇宙の虚空の先で大きな爆発を起こす。

札はくるりと向きを変えサグメへと向かう。

こちらの札も大きく爆ぜサグメは地に倒れる

「今、月の都は純狐という人物に狙われています。

幻想郷を襲撃したのもそれを打開するためです。

どうかご理解いただきたい。」

「その女を倒してほしい：幻想郷から来たということは八意様が関わってるであろう

…」

サグメは意識をなくした。

「じゃあそいつのどこに行ってみるか。」

「どんなやつでもこの霧雨魔理沙様がぶちのめしてやるのぜ！」

フランのおやつたいむくう。What does a blood contr  
act bring to a vampire?

「お姉さまも咲夜もいなくて暇だなあ」

紅魔館。地下牢に引きこもる狂気の吸血鬼。

私、フランドールは今日もベッドで暇人していた。



咲夜がいないから美鈴も門番の仕事離れないっばいし…

そうだ！お姉さまの部屋に忍び込んでお兄様の血を盗んでやろっ！

盗みのコツなら魔理沙から教わっている。

館の中にはあほの妖精メイドとパチュリーだけ。

いけるぞこれは。

くれみりあのへや

「潜入成功！お姉さままつたらちよろすぎるわ!!」

トラップも警報もなんにもないんだから。

「……かな？」

クローゼットの中を見る。

血に染まった服が数着が掛けられている。こっちはお兄様とあそぶとき専用服（通称

うるとらうあんぱいあすーつ）だ。黒いのと白いのがある。

下の引き出しの奥に金庫が見える。

おもいきり手を伸ばして取る。

「あかないや」

ダイヤルキーがついている。

完全に盲点だった。

『破壊』するわけにはいかないし  
どうしよう。

適当にお姉さまの誕生日を入れてみた。

ガチャ。

あいたわ

「ちよろ」

中にある献血パックを持ち出す。

「いいかコードネーム・フランドール。帰るまでが遠足だコピーー！」

ノリノリで地下牢に向かう。

ここは、危険だなあ

ヴワル魔法図書館。紅魔館の地下にある幻想郷最大の図書館。（他にあるのかわかん

ないけど）

ここにはパチュリーがいる。

ばれればお仕置き確定だ。

なんとしても抜けなければ…

こっそり進む。

それにしてもほこりっぽいなあ

あつやばい…

「はっはっはっくしゅうんん」

大きなくしやみが図書館に響く。

やばいいいい 逃げなきや！

思い切り走り出す。

だけど入り組んだ図書館の中でそんなスピード出したら曲がりきれないのに

…

どごおおおおおん！

おおきな音とともに棚が一つ倒れる。

フランは立ち止まる。

本が一冊落ちた衝撃で開く

「フラン…？」

どうしようパチュリーが来ちゃう。

そうだ！飲んじやえ！

封を切り中身を飲み干す。

そのとき、一冊の本が光を発する。

血のような暗い紅い光<sup>あか</sup>

手形のような形が浮かぶ。

「なんだろう…?」

てを当ててみる。

より濃い色強い光が発され、フランの周りを光と同じ色の炎が包む。

「ちよつと！フラン！大丈夫!？」

パチュリーが来たみたいだ…

フランは意識を手放した。

フランを包む炎が消え、

本に文字が浮かび上がる。

F o r m a t i o n   o f   a   c o n t r a c t

## 天照大御神の光

「さあつて！純孤つて誰だよ…」

サグメという月の民からきいたがどこにいるのか検討もつかない。  
場所は月の都（凍結）の中心地。

度重なる戦闘の疲れを癒やすため咲夜が紅茶を入れてくれている。

「どうぞ」

「ありがとなのぜ」

「咲夜さすが上出来ね。」

「うまつさすが咲夜は食事だけは侮れないわね…」

「ありがとう」

各々が咲夜に礼を言い紅茶を飲む。

「おいしー」

それでさつきから後ろから視線を感じるぞ…？

「ねえ楓…」

霊夢が声を潜めて尋ねる。

「気づいてる?」

「ああ 仕掛けるか?」

霊夢がこくりとうなずく。

後ろを振り向くと壁からひよつこり顔を出している玉兔。ヘルメットからうさみみがひよこんとでている。

その時あわてた様子で逃げていく。

「追うぞ。」

俺に続き霊夢が走り出す。

「ちよつちよ!いきなりなんだぜ!」

「まっ待ちなさいよ!」

後ろから聞こえる魔理沙とレミリアの声。

やがて聞こえなくなり正面には未だ逃げ続ける玉兔。

手には銃剣が握られている。

スカートからのぞいているしっぽがかわいい。

「武器『偽慥剣』」

霊力が結集し刀の形になる。

玉兔に急接近し発動する。

「悲愴『憐憫たる居合』」

鞘から抜かれた刀は無慈悲にもその銃剣を切り裂く。

「あつ武器が!…」

「散霊『夢想封印 寂』」

霊夢がものすごい速度で距離を詰め

光弾と御札を高速で射出する。

徐々に密度が高くなり玉兎は避けきれず頬が切れる

「いたっ」

その時閃光が玉兎と俺たちを隔てる。

霊夢の弾幕はすべて飲み込まれる

「レイセンに手を出しましたね…」

減衰する閃光の先には少女の姿。

薄紫の髪。

れいせん?

「鈴仙ならあつちで紅茶を飲んでいるが…」

「鈴仙…まさかあの娘が…」

ぶつぶつとなにか言っているがよく聞こえない。

「まあいい。レイセンに手はださせませんよ。」

なんだろう罪悪感が出てくるんでやめてもらってもいいですか？

『祇園様の力』!!」

薄紫の少女は刀を振る。

無数の刃が周囲から生える。

隙間なく埋められた刃は簡単に楓の脚を貫く。

「よけない…」

絶対不可避の弾幕。

「弾幕ごっこは月には浸透してないのか…」

薄紫の少女は目を見開き口を開く。

「八意様の使者ですか…」

なるほど。弾幕ごっこですか。

避けれる弾幕になんの美しさがあるのでしょうか。」

『火雷神』

ぽつつという水滴の音。

月にも関わらず雨天となり雷鳴が鳴り響く。

雷神の怒りの声とともに霹靂が狂いなく自分の頭上を狙う。



「『機動力』に変換！」

目にも留まらぬ速さで高速移動で初弾を回避する。  
ところが雷は向きを変え楓を追尾する。

「手形『洩矢神 ミシヤグジさま』」

巨大な白蛇が現れ雷撃を飲み込む。

白蛇は満足げな顔で消える。

やっぱ手形の瞬間火力はすげえな…

薄紫の少女は光を帯びる。

大量の高密度弾幕が降りかかる。

「ちっ。」

おもわず舌打ちを放ち、偽慥劔で斬りかかる。

だがギリギリで避けられる

少女は表情ひとつかえず言い放つ。

「神聖たる光で照らし出せ！『天照大御神』!!」